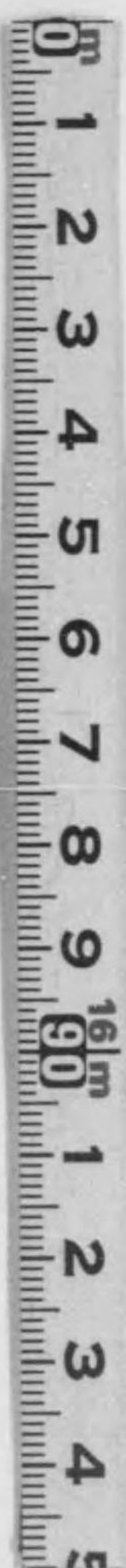


344

152



始





344  
152

富益義衛著

花の  
君子 菊花栽培法

全

發行所 泉種苗株式會社書籍部



744-152

富益義衛著

花の  
君子  
菊花栽培法

全

大正  
2. 2. 18

發行所 日永種苗株式會社書籍部

菊花栽培法  
富益義衛著  
日永種苗株式會社發行



花中君子 菊花栽培法目次

第一章 緒言

第一節 皇室の御紋章

光輝ある十六片——第一説——第二説——第三説——大隈伯爵の説

第二節 支那と菊花

長壽の靈花——陶淵明の詩——延齡妙藥——菊の字義

第三節 日本と菊花

菊の御宴——菊合せ——菊のきせ綿——明治天皇の觀菊會

第四節 歐洲と菊花

菊花とジョセフィン——日本菊の英佛征服——菊花培養の秘密

——黄金の花



第五節 菊花培養家の覺悟……………一三

愛花國民と菊花—東西趣味の相違—菊花國の美名を保持せよ

第二章 沿革……………一六

第一節 菊の名稱……………一六

洋名—漢名—和名—異名—口啤—花言葉

第二節 栽培沿革……………一八

菊花の起源—栽培沿革—伊藤博士談

第三章 種類……………二二

第一節 種別……………二二

花の大小—瓣の形狀—花の色彩—咲方種別

第二節 品種……………二五

第三節 品評十品……………六三

位置—花形—色澤—單重瓣花軸—藥—葩—時節—葉—草姿

第四章 用土及肥料……………六七

第一節 用土……………六八

培土の準備—培土調製法—土壤作成法

第二節 肥料……………七〇

肥料各説—水肥の製法—第一説—第二説—第三説—施肥上の注意

第五章 園養法……………七四

第一節 花壇……………七四



花壇の場所 花壇の構造 三間花壇 四間花壇 花壇の準備

四

第二節 栽植

七七

苗の撰擇 苗の移植 栽植の時期 栽植の方法 種半主人談

第三節 手入

八〇

摘芽の程度 眞芽と脇芽 最後の摘芽 施肥法 止肥と灌水

第四節 注意

八二

花壇菊に對する注意 豫備菊に對する注意

第六章 盆養法

八四

第一節 盆養菊を作る心得

八四

盆栽の眞味 生花と盆栽

第二節 植木鉢

八六

鉢の撰擇 鉢の表裏 鉢と輪數

第三節 盆養土

八八

作土の調製 盛土法

第四節 盆養肥料

八九

置肥の調製 使用法

第五節 鉢植法

九一

鉢植の時期 栽植の方法 植付後の管理

第六節 手入

九二

灌水 支柱 催苔法

第七節 注意

九四

第一 第二 第三

第七章 仕立方

九六

五



第一節 千輪咲法……………九六

仕立方—第一説—第二説

第二節 一輪咲法……………九八

仕立方—第一説—第二説

第三節 鬢差作り……………九九

仕立方

第四節 篠作り……………一〇〇

篠作りの特色—専門家の意見

第八章 繁殖法……………一〇二

第一節 繁殖法の種別……………一〇二

母株繁殖—異株繁殖

第二節 根分法……………一〇三

根分の時季—冬至分—彼岸分分蘖法

第三節 挿木法……………一〇五

芽挿法—實驗説—葉挿法—枝挿法

第四節 接木法……………一〇八

接木の時季—砧木の選擇—割接法—施術後の管理—注意三

項

第五節 實生法……………一一一

採種法—人工媒助法—播種床—播種法—播種量—實驗説

第九章 手入法……………一一七

第一節 灌水……………一一七

灌水の目的—園養と盆養—時刻と用量—灌水用水—灌水の方法

第二節 支柱……………一一九

支柱の必要—支柱の材料—支柱の時季—園養の支柱—盆養



の支柱—樹て方の注意

八

第三節 芽の手入

一二二

摘芽の目的—摘芽の時季—菊芽の管理—芽の良否

第四節 花の手入

一二三

花の着方—花の覆ひ—構造法—花の手入

第十章 驅蟲法

一二七

第一節 菊虎

一二七

習性形状—防除法

第二節 蚜虫

一二八

習性經過—防除法

第三節 其他の害虫

一二九

蝗虫—青綿—尺蠖—根蟻—茶星—白星—驅除と豫防

附 録

菊花發展史

一三一

菊之説

一三七



花の 君子 菊花栽培法

第一章 緒言

富益紫怨著

天高く氣清く風寒うして月冷かなる蕭條落葉の晩秋うら枯れ果てし野に岡に、  
 愛すべき賞すべき花なく草なく閑たる前庭寂たる後園唯落葉の飄々たるばかり、  
 此の時に當りて東籬の下花壇の中獨り白銀の霜を戴き、颯々の風を冒し、凜として  
 清雅高逸坐に隠士の面影を偲ばしめ、幽香冷艶直に節操美はしき貞女の情趣を思  
 はしむるものは即ち菊花である、宜なるかな古來花中の君子を以て目せられ、漢に  
 ありては、淵明が熱愛の詩に入り、和にありては、嵐雪が黄菊白菊の句となり、又は心  
 あてにおらばや折らむの優しき三十一文字に詠まれたるなど、風騷の客が妙なる  
 筆の雫に彩られたる韻事佳話も甚だ少くない。



余輩は今此の幽逸なる高雅なる秋を領する花の王菊花の培養法一斑を説き、三  
畦の冷香に憧れ、半籬に清艶を賞づるの聖趣佳情を廣く世人に奨めんとするに當  
り、先づ聊か此の花の故事來歴傳説等に就て略述しておきたいと思ふ、蓋し培養の  
趣味を一層深甚ならしめんが爲めに外ならぬのである。

第一節 皇室の御紋章

南殿の階に召して讀え給ふ貴人も、葦屋の破垣に賞づる賤女も、菊花の聖き姿と  
清き香とに接しては、等しく肅然襟を正さざるものはない、然も特に此の花の光榮  
とすべく、又此の花に對して直に腦底に浮び來る聯想は、彼の光輝ある十六片の菊  
花即ち我が皇室の御紋章である。

春夏秋冬を通じて世に花多しと雖も、獨り菊花が忝くも皇室の御紋章たる光榮  
を荷つた起因に就ては、古來異説百出、輕々に斷案を下すことは出來ないが、今その  
主なる二三の説を紹介して見やう。

(一) 伊勢貞丈雜記には、天子の御紋章と云ふこと上古には之なし、源平合戦の頃よ

りは御幕などに菊桐の御紋章をつけ始められしなるべきか、菊桐は元來は御裝束  
の織紋なり、これを武家の定紋の如く、御幕にも何にも用ひられしなるべし、黃檗染  
と云ふ御裝束には、桐竹麒麟の織紋あり、赤色と云ふ御裝束には、桐竹の織紋あり、又  
窠の中には、八葉の菊唐草の織紋あり」と記してある、又畔田翠山の説には、桐の御紋  
は、吳錦なり、菊の御紋は、倭文より取り給ふなるべし」とある、要するに菊の御紋章は、  
天子御裝束の織紋より來りしものであらうと云ふ、考古學者の説。

(二) 五七の桐と共に我が皇室の御紋章として菊花を御治定になつたのは何時の  
頃からであるか、精確なことは分らぬ、只菊は昔より目出度い花と考へられ、支那で  
は、仙家の花と稱し、其の露の滴りを飲めば、壽命を延ぶると言ひ傳へられて居る、從  
つて之が天子の御服地の模様となり、源平時代頃家紋の追々に、行はれ初めた時、分  
皇室の御紋章となつたものであらうとの説。

(三) 總て植物の高下は、その複雑と單純とに依つて分たれたのであるが、菊はその  
最も複雑にして高等なる植物である、そして古の歌などに、菊をククと詠んだもの  
がある所から推して見ると、其の昔は一般にククと稱へたに相違ない、それは花頭



に多數小花の集合したる形状が宛然多くの花を括つた様に見ゆるからであらう。即ち天皇は庶民の上において蒼生を統べタタリ給ふにより其のククリの意味通するの故を以て菊花を御紋章に採用あらせられたのではあるまいかと云ふ植物學者の説

又菊花に就て最甚深の趣味と該博の智識とを有して居られる大隈伯爵は菊花の皇室の御紋章と定つたのは鎌倉時代から室町時代の間で此の花を目して最も高尚なもの優美なもの尊重した結果ではないかと思ふと言はれて居る。之を要するに這般の消息は九重の雲深き長き御歴史に關することであつて濫りに臣子の憶測を逞ふすることを許さないが煎する所高尚優美秀香逸姿何一つ缺點のない菊花は我金甌無缺なる日本皇室の御紋章として六千余萬の國民が尊重崇敬すべき價値ありと認むるは何人も信じて疑はざる所である。

第二節 支那と菊花

長壽の靈花 今日歐米人は我國を稱して菊花國と呼び菊花の日本と謳つて居

るが現今賞美愛翫の全盛を極めつゝある菊花は安ぞ知らん日本固有のものではない日本固有の菊と云ふのは山蔭や野末などに姿可憐らしう咲き匂ふて居る河原よもぎと稱する野菊である然らば清麗秀美の花香を誇る今日の菊花は何時の頃何處より傳來したものであらうか一説には朝鮮からとも云ひ又印度からとも云ふが事實は奈良平安朝の頃往復頻繁であつた遣唐使が支那から齎らしたものであつた。その當時陶淵明と云ふ隱逸の士があつて此の花を熱愛したことは有名な話であるが支那では或は日精と名け或は傳公延年などと呼んで古くから長命息災の靈花として珍重愛養して居る。

陶淵明の詩 菊は支那古代では薬にしたもので神農本草には土品薬の中に收めてある例の泪羅に身を沈めた屈原の楚辭には秋菊の落英を餐すと云ふ句がある。菊で名高い晋の高士陶淵明の菊を採る東籬の下悠然として南山を見る山氣日夕佳飛鳥相與に還る此中真意あり辯せんと欲して已に言を忘ると云ふ詩は今尚人口に膾炙して居る。

延齡の妙薬 菊が延齡に効あることは昔から種々の傳説がある抱朴子には南



陽野縣の山中に甘谷と云ふ谷があつて、山に一面菊が咲いて居る、その花が水に落ちて水に妙香を傳へ且つ甘露のやうに甘い、その水を飲んで居る谷の側の人民は何れも長壽を保つて居る又列仙傳に彭祖菊を服す長壽なり齡七百餘歳顔色壯にして十七八才の如しとある繪にある菊壽童子は即ちこれである。

第三節 日本と菊花

菊の御宴 關根博士の談によれば桓武帝の延暦十六年十月宮中に御宴を催され此の頃のしぐれの雨に菊の花ちりぞしぬべきあたらしその香をとの御製ありて五位以上の官人に衣を賜つたこれが菊の名の書籍に載せられた初である云はれたが又或る人の説によれば仁明天皇の時初めて菊の宴を催されて御製を遊ば

されたと云ふ其の何れが真何れが先であるかは今明言することは出来ないが何時頃からともなしに平安朝の時代には既に宮中に於て菊花の宴を御開きになる例となつたのは事實である即ち重陽の宴又は菊の節會と云つて九月九日群臣を召して宴を賜り學者は探韻に依り詩を賦して奉る民間に在つても菊の節會と呼び登高と稱して山に遊び茱萸の房を頭に挿して悪氣を拂ふと云ふ習慣もあつた之等は之れも支那から傳つた傳説及び儀式である。



ちその遺習である。  
菊のきせ綿 平安朝時代に於ては菊の花の上に綿をおきその綿に泌みた香り  
ある露で顔を拭へば老を去つて若返るとして賞翫するの風が流行した。それも初  
めは多分霜除けの積りにしたのがかく轉用せられたのであらうと思ふ。兎に角此  
の流行は盛で遂には此の綿を贈物になどした人もあつた。紫式部日記の中に御堂  
關白道長公の室が彼の菊の綿を式部に贈つて老を拭ひ捨てよと云つた返事に式  
部が

菊の露わくるばかりに袖ぬれて

花のあるじに千代はゆづらひ

と詠じたことがある。又加茂保憲女の歌に

あえよとて菊の白露のごへども

過ぎにしよはひかへらざりけり

定家集にも

夕露のおくまで菊を見つるかな

とある是等の歌がある。菊の露で顔を拭へば老の皺がなくなると言ひ傳へた  
ことはわかる。故に綿に限らず菊の花そのもので顔を拭ふたのも當時の歌の詞な  
どに澤山見える。此の由來は支那で菊を仙家の花と云ひ日本でも翁草など異名を  
附けて長命をする仙人の花だ目出度い花だと云つて喜んだからである。  
明治天皇の觀菊會 漢唐の流を汲んで古は我國でも陰歷の九月を重陽と云ひ  
九月九日を菊見の節句と稱へて菊花の宴を開き給ふの習慣となつて居たことは  
先述の通りであるが爾來幾百年星遷り物變り明治の御代に至つては十一月三日  
の天長節に朝廷に於ては觀菊の宴を催されて外國使臣は勿論朝野の名士を御招  
待になりて酒肴を賜はり主上親しく御案内遊ばさるゝのであつた。されば日本皇  
室の觀菊會と云へば世界萬國知らないものはないと云ふ程に有名なもので此の  
宴會に參列するのを無上の名譽と心得て態々其の機を見計らつて來遊する外國  
知名の士も少くなかつたと云ふ話である。思ふに幾百千の花ありと雖も斯くの如  
き名譽と光榮とを併せ荷つて居る花は櫻花と菊花との外には何一つとしてない



此の兩花にして若し靈あらば必らずやその厚遇に感泣するであらう。特に菊花は今回明治天皇の御登遐に對しては清姿爲めに色褪せ秀芳爲めに薰りを失ひ慟哭之を久うするであらう。

十

#### 第四節 歐洲と菊花

菊花とジョセフィン 歐洲各國の中でも昨今最も菊花培養の流行を極めつゝあるのは佛國であつて今より五年前即ち明治四十一年十一月には、巴里に於て盛大なる菊花百年祭を執行した位である。その菊花の初めて佛國に傳來した起因に就て茲に一場の佳話がある。時は千八百十年頃、佛國マルセーユの或る商船の船長で、ヒエル、ルイ、ブランカールと云ふ人が、東洋航行の尋で、支那から珍らしい菊花數種を持ち歸つて之を時の皇后、ジョセフィン及び皇帝ナポレオン第一世に奉つて賞金に預つた。併し此の時までは禁苑の一部に移植されて霜に傲るの節操を賞づるは只高貴の數人のみに止つて、未だ一般には知られなかつた所が、千八百三十年頃、偶近衛の一歸休兵は庭苑に菊花の種子の落ちこぼれて居たのを拾つて

#### 法 培 栽 花 菊

自分の故郷なるトゥールーズに持ち歸つて播種した。これが抑々佛國民間に此の菊花の美しくい姿を見るやうになつた。濫觴でそれ以來一般公私の庭園に之を培養するやうになつたと云ふことである。

日本菊の英佛征服 さて那翁皇室に於て賞翫された菊花も美は即ち美であつたらう。併しその莖幹甚だ短く、其の花瓣甚だ少く、到底日本今日の菊花に比較せらるべきものでなかつたことは無論である。菊花が初め其の源を印度に發し、支那に培養され、それから日本に來て大發展を遂げたのは釋尊の説かれた大小乗の教義と同じ筋路を辿つて來て、これは頗る面白い事柄であると思ふ。餘事は扱ておき、日本の菊花の佛國に齎らされたのは、まだ幾年にもならない事であつて、佛國人ロベル、プオル、チューンと云ふ人が、日本から數種を持ち行き、巴里附近なるグーエル、サイユの故王宮の庭園に植たのが初めてで、それが更に英國人ジョン、サンター氏によつて英吉利へ移植されたのである。爾來僅かな年月の間に、日本の菊花は英佛のあらゆる公私の庭園を征服して了つた。英佛人が自園に小園子、坂小染井を作り出して得意がつて居るものもある。日本菊花の勢力は實に素晴らしいものである。

#### 法 培 栽 花 菊

十二



菊花培養の秘密 前記ロベル、フオルチューン氏は自ら日本菊花通を以て許して居る、而して其の栽培の秘密を手に入れて居ると云ふて居る、其の所謂秘密なるものを聞くに、日本の愛菊家例へば大隈伯の如きは菊の花に結んだ種子を採取し翌年春季に之を播種してその内に天然の作用で紅白異種の花を咲かしめるを得るに至る、たゞ根分けした丈では黄は黄白は白で何年経つても同一の花だけしか得られぬと言つて居る、我々には少しも秘密とは思はぬが、彼の國に於ては大々的の秘密かも知れぬ。

黄金の花 或る書に英語のクリサンテム(菊)は禁裡様の紋から轉訛したものである、と書いてあつたが、それは牽強附會の最も甚だしい説と言はねばならぬ、何故かと云ふに、クリサンテムの名は、未だわが國に菊花の傳來しない以前今より凡そ二千年の昔既に歐洲の書に見えて居つて、希臘語ではクルツツス(金)アテモン(花)即ち黄金の花と讀えられて居るのより察して見ても、假令今日の如く清麗幽雅なものではなかつたにしろ、古代歐洲の地に菊花の存在して居つたことは疑ふべからざる事實であると思ふ。

第五節 菊花培養家の覺悟

愛花國民と菊花 菊花の故事來歴傳説等に關する和漢洋の一斑は大略上述の通りであるが、何れも其の當初は決して今日の花壇に清香を擅にして居るやうな艶美なものではなかつた所が、元來日本人は愛花國民である、梅でも牡丹でも然うであるが、一度輸入して日本人の手に渡るや否や種類も増加し培養法も宜しきを得て、忽ちの間に清麗雅絶純然たる日本固有の菊花となして了つて、本家本元たる印度支那を初め、世界各國争ふて日本菊の培養に力むるやうになつた、一面に於ては武勇絶倫一度起つて秋水の如き日本刀を揮へば、金鐵の固きも粉碎せずんば止まざる日本國民が、他の一面に於ては、此の色も香も美はしき菊花を愛すると云ふ優美なる心を持つて居るのは實に花も實もある日本武士道の神髓として世界に誇るべき價値があると絶叫するを憚らぬ。

東西趣味の相違 上は畏くも禁苑に清香美容を呈して高貴の御寵愛を蒙り下は賤が破垣に霜の薄化粧氣高う咲き誇りては、花守娘の纖手に手折らるゝ幸多き



法 培 栽 花 菊

此の花に對しては、誰も彼も皆一樣に同じ菊花を同じ趣味を以て愛翫するかと云ふに、各人面容の異つて居るのと一般その趣味嗜好の上にも亦多少の相違あるは免れない次第である。

今地方的に其の趣味を異にしたる一例を挙げんに、東京附近では中菊に最も趣味を有して之を愛好し、加州金澤又は南部八之戸地方では大菊の一枝に多くの花を着くるものよりも、數は少くとも大輪にして花色艶美氣品の高いのを賞美するの傾向があり、京阪地方では糸菊と稱する花瓣の細いのを珍重愛翫して居る様である。次に東西人を比較して見るに、概して日本人は清楚冷艶を愛すると云ふ趣を持つて居るが、西洋人は全く之と反對で、毬の形に似たる大輪咲又は楕圓にして抱き合ふが如き形に咲くもので、殊に其の色彩薫香に趣を有し濃艶濃香を愛賞して邦人の如く其の葉の興味ある風情を賞し、花の變化せしものに無量の興趣ありとなすが如き俳味は、未だ彼等の味ひ得ざる所である。

菊花國の美名を保持せよ。併し乍ら近時歐米に於ける之が栽培の進歩は實に驚くべきもので、その栽培に注目を拂ふ様になつたのは僅々百年ばかりに過ぎな

法 培 栽 花 菊

いの近時盛に我日本菊を輸入し培養に力めて居る歐州各國の中で、特に佛國に於ては其栽培最も盛にして、年々珍奇なる改良種を産出し、前記菊花百年祭などはサムライイサダヤツコ、ウエルス、ナーブル等の新種に新珍名を附して出品するが如き、其の進歩の迅速なること實に驚嘆の外はない。加之最近西洋に於ける園藝科學の進歩は非常の勢力を以て發達し、若し此の勢ひにして止まる所がなかつたならば、近き將來に於ては、菊花國として誇つて居る日本菊も、其の特質を歐米諸國に奪はれ却つて反對に、西洋諸國から優等種の輸入を仰ぐやうになりはしないかと懸念せざるを得ない。されば世の菊花培養家は、常に世界の大局に目を注いで、從來の日本菊獨特の真美を中外に發揮し、以て永久に菊花國の美名を保持獨占して、歐米人に垂涎三尺たらしむるの覺悟がなくてはならぬ。

菊作り妻に親しき振もなし  
着せ袖や老ひ行く菊の花の貌  
月花も昔白菊の夕かな  
菊十日流人なとめて小杯  
青斗 青 青 青  
青 入 青 青



第二章 沿 草

第一節 菊の名稱

洋名 菊は菊科に属する宿根草であつて學名を Chrysanthemum Sinense と云ひ英獨名を Chrysanthemum 佛名を Chrysanthem と云ふ又歐米人は愛翫賞美の結果秋の女王 Queen of the Autumn の異名さへ與ふる様になつた。

漢名 次之が漢名に至りては其の稱呼頗る多く節華、女華、女節、日精、女莖、更生、金蕪、治蕪、周盈、陰成、傳延年、隱君子等凡て目出度い名ばかりである。

和名 又翻つて和名如何と見るに其の異名殆ど百を以て數ふべくかはらよもぎ、さきな等の古稱を初め或は國歌に詠ぜられ或は口碑によりて傳へられたるもの枚舉に暇ない位である即ち、

- ちぎり草 星見草 知世美草 形見草 齡草
- 山路草 少女草 翁草 草の主 殘草

法 培 栽 花 菊

いなで草

秋の花

秋しくの草

百夜草

長月草

山名草

弟草

等は其の主なるものであるが之等の異名の起因に就て最も興味あるもの二三を略記して見やう。

百夜草 昔大和國三輪の里に老翁が居て庭に只一本菊を植えて居た所がその菊は冬になつても春になつても花も葉も變らないので近所の者が不思議に思つて能く聞いて見ると此の老翁七月一日から百夜菊の下露を器物に受けておいてその露を毎月花に注ぐので四季共に枯れないのぢやと云つたそれで百夜草と云ふ名のついたのだ相である。

星見草 欠方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれけると云ふ古今集の歌による。

弟草 梅を花の兄と言ひ菊の花を弟と云ふ所から此の名を得たのであらう。

草の主 かはかりの匂はあらし菊の花宜こそ草の主となりけれ (匡房)

隱君子 蘭竹梅菊を四君子と云ふその一つであるから此の名がある。

法 培 栽 花 菊



契草 昔奥洲に兄弟が居た何かの譯で弟は九洲へ行かなければならなくなつたので兄が庭にあつた一本の菊を根分けして形見に遣つて戀しい時はお互にこれを見ることにしやうと契つて別れた其の後菊に花は咲いたけれども片枝づゝしか咲かなかつたと云ふことである。

斯んな口碑はまだ幾らもあるけれども徒らに限りある紙数を冗費するばかりであるから以下之を省略し代りに花言葉の一節を録し直に栽培の沿革及品種に言及しやうと思ふ。

花言葉 菊花は總じて貞操高潔を意味するものとせられて居るが又その花色によりて幾分の差異がある即ち

紅花のものは愛を意味し

白花のものは誠實貞操眞理を意味し

黄花のものは愛の輕視又は愛に背反するの意があるとせられて居る。

第二節 栽培沿革

本邦に於ける菊花培養の起源は仁徳天皇の御宇からである而して寛文寶永時代から正徳享保を経て寶暦年間に至つて最も隆盛を極めそれより一進一退一盛一衰幾多の變遷を経て遂に今日の如く盛に栽培せらるゝやうになつたものである併し其の昔は唯菊花の馨を賞揚するだけで今日の如く美大艶麗なる又秀薫佳香なる良品のなかつたことも勿論である即ち幾多の年月を経ると共に幾多の淘汰を施され終に今日の盛況を來したものである以上は多くの人の一致する栽培沿革の大要であるが又只その栽培の起原に就ては人に依つて多少異つた意見を有して居るものもある併し本邦固有の野路菊にしても支那より舶載の菊花にしても古來わが國の朝野に栽培せられて居つたことは何人も信じて疑はざる事實である尙余輩は伊藤博士の談を得たればそを左に掲載して光輝ある菊花の栽培沿革を詳細闡明に紹介しておかうと思ふ。

菊は東洋の名花でわが皇帝の御紋章である事は言ふまでもないが明治天皇には格別此花をお愛しになり古から之が國民の一つの誇になつて居た所が此頃では歐米でも盛に愛培賞観される様になつて菊の會とか菊に關する著述や雜誌を



出して盛に研究されて居るが此點から云へば我國なぞは比較的怠られて居ると云はねばならぬ併し支那から日本へ初めて來たのは今から千百數十年前丁度桓武天皇より少し以前のこと、随分古い事である支那には勿論それ以前にも盛に培養されて著述などもあり種類も少くなかつた例へば宋の范成大や范劉蒙の如き其栽培上の名家も多かつたそれが本邦に渡つて更に一般の進歩をなし正徳頃から享保年間へかけて尤も流行した正徳五年の十月京都では九日間に亘つて東山や北野や四條邊りで盛んな菊の會を催して闘花の遊びをしたと云ふことが東山菊大會名寄花形附と云ふ本に書いてある只當時は變り物を愛すると云ふ事が今日の如く流行せず出品者も五十名内外品數も百五十余种に過ぎなかつたそれから享保になつて菊の會が益々盛になり品種も増加し獨り京都のみならず江戸でも盛に流行して宋山侯菊經と云ふ本などで見ると楠木屋や民間から進んで遂に大名迄が投花遊びをする様になつた當時の流行花は多くは今日比較的少い丁子菊の種類で元祿十二年出版の「知世美草」には探幽が寫生をした丁子菊の繪等が掲つて居る斯くの如く日本に於ける菊の發達要素は非常に古いもので徳川時代

から明治時代に入つて遂に今日の盛大を見るに至つた即ち菊花の東洋的發達は輝ける明治天皇の御代に於て最高潮に達したのかも知れぬ。

招く尾花に誘はれてまたも深き夢のこと  
立ちしは昨日彼の野原千草亂るゝ其中に  
嬉れしや汝れを見出しぬ淨く氣高く麗はしき  
あゝ愛らしの野路の菊  
土のしとれと諸共に手にせし時の我が胸は  
若き血潮の波打ちぬ今は植えてぞ文机の  
上にながむる菊の花清き流れはなけれども  
かふるに愛の泉あり  
われも一度は汝れに似し乙女もがなと夢見しが  
覺めて果敢なきあしたよりなでう望まむ塵の世に  
あゝ愛らしの野路の菊あゝうるはしの菊の花



### 第三章 種類

#### 第一節 種別

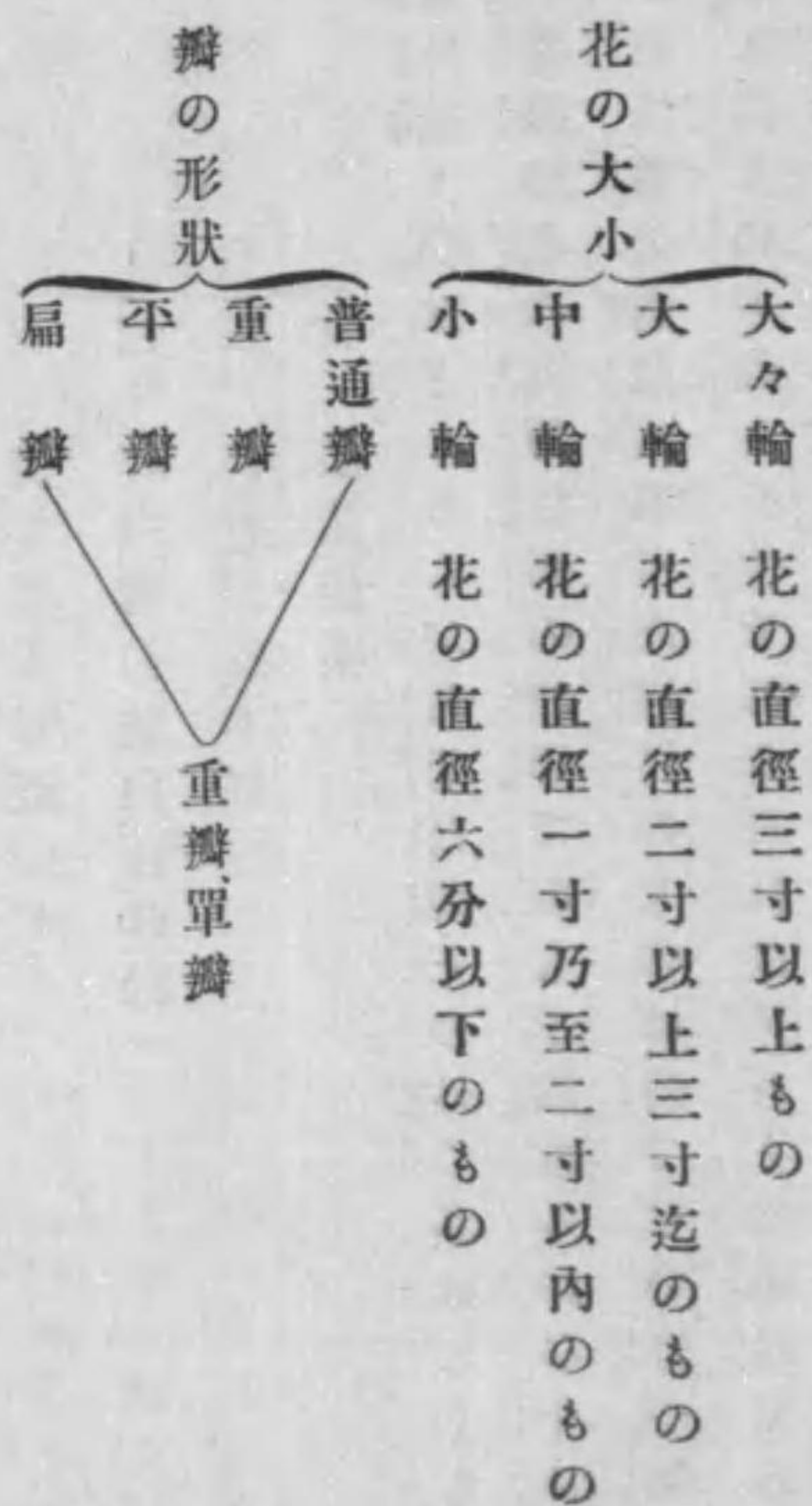
#### 菊 花 栽 培 法

菊花は斯くの如く栽培の起原古く栽培の沿革長く幾多の年月の間に幾多の淘汰を施され又幾多の變遷と幾多の發達とを遂げて遂に今日の盛況を見るに至つたのであるから其の種類も亦頗る多いのみならず之が培養は日を追ふて益々盛大に赴き或は人工媒助により或は播種接木により年々歳々新種逸品の養成に苦心するの有様にて昨年の珍花早や今年の凡花となるの趨勢なれば今後尙幾千百の珍種佳品の續出するや殆ど豫測し難い程である故に今日確然たる種類の凡てを網羅することは困難であるけれども聊か著者研讀の一端を陳ぶることとしやう。

種類の區別及び品目を述べんとするに先ちて一言して置かねばならぬことは、菊に春菊夏菊秋菊寒菊の四種あることである其の原種は同一であつたに相違ないが今日では開花期に依つて區別され且つ各種共又數十數百乃至は數千の品種を有して居るが世上一般普通に菊花と云へば特に斷るまでもなく大部分の他の三種を除いた秋菊を指して云ふのである故に本書に於ても専ら秋菊の培養に就て講述しておく考であるがその秋菊の種類だけでも五六十種の多きに達し尙益々新種の増加を見んとして居る有様である。

余輩は先づ花形瓣状色彩咲方等に就て大別し然る後に主なる品種に就て少解を試みることにしやう。

#### 菊 花 栽 培 法





花の色彩  
黄 淡黄、濃黄、鮮黄  
白 純白、雪白、鴉白、汚れ白  
紅 淡紅、濃紅、本紅  
紫 濃紫、淡紫

此外、絢り、縞などもあるが、黄菊、白菊その外の名はなくも、かなの嵐雪の句の通り、菊の實際の色は黄菊、白菊の二種であらう、故あるかな、今日でも、此の二種は特に珍重されて、眞の菊栽培家は、此以外のものは菊でない、紅や紫の菊は素人菊だと云つて嘲り罵り、殆ど顧みぬ位である、これは又あまり極端であるが、兎に角、氣品の點に於て、韻致ある點に於て、黄菊、白菊が他色彩の菊花を壓して居ることは事實である。

|      |      |    |     |      |       |      |
|------|------|----|-----|------|-------|------|
| 咲方種別 | 一文字咲 | 狂咲 | 管咲  | 牡丹咲  | 秋津島   | 峰の雪等 |
| 丁字咲  | 錦の御旗 | 男山 | 大上金 | 白鳳等  | 旭日の鶴等 | 大清龍等 |
|      | 籬の秋  |    |     | 白丁字等 |       |      |

第二節 品 種

|     |     |      |
|-----|-----|------|
| 絢り咲 | 源平  | 大和錦等 |
| 毳咲  | 黄金閣 | 夜光玉等 |

菊の品目数千種、悉く之を網羅せんことは到底本書の能くし得ざる所なるを以て、茲には其の最も著名にして且つ普通に培養せられつゝあるもの六百餘種を撰んで、其の花形、色彩、大小、咲方、其の他の要點を解説することにした、尤も此の銘鑑は、著者が専門家に聞き、花戸に質し、取捨詮考して集成したるものであるから、或は一、二同名異種のものなしとも限らぬ、此の點は豫めこゝにお断りしておく。

牡丹咲の部

- 秋津島 雪白管の大走りにして、重抱最大輪の貴品なり。
- 月世界 銀管大走り萬重の牡丹咲抱にして、最大輪なり。
- 秋芳 雪白管大走りの萬重抱大々輪にして、貴品なり。



初吹雪 雪白大管走り萬重平抱にして最大輪の見事なるものなり。  
 八千代 雪白管大走りの萬重抱にして最大輪を開く。  
 神代舞 本紅管の大走り萬重抱爪白にして最大輪を有す。  
 四方の譽 純白管大走りにして千重抱の大輪なり。  
 朝陽の譽 雪白平走り萬重平抱の最大輪なり。  
 天地開 肉色管大走り萬重抱咲の大々輪なり。  
 御所櫻 櫻色の大太管走り平抱千重にして最大輪を開く。  
 初時雨 白に薄紅裊色の飛白編入大太管走り平抱千重にして至て最大輪なり。  
 金盃 黄平走り萬重抱の牡丹咲にして大々輪をつく。  
 月の影 雪白管走り萬重抱への大々輪なり。  
 高雄の秋 禪管大走りにして萬重抱の大々輪なり。  
 萬里の響 純黄大管走りの萬重抱にして大々輪なり。  
 深山雪 雪白管走り萬重平抱の大々輪を開く。  
 神代衣 金禪管大走りにして萬重抱咲の最大輪なり。  
 雪嵐 純白管大走り平抱萬重にして最も大輪なる花を開く。  
 黄龍閣 純黄管大走り千重抱咲にして最大輪なり。

初日の出 本紅管大走りにして萬重抱咲の大々輪なり。  
 水晶閣 純白管走り萬重抱咲にして最大輪なり。  
 双鷺鶯 淡紅管大走りにして萬重抱咲の最大輪なり。  
 二十山 純白管大走りの萬重抱咲にして最大輪の貴品なり。  
 井出の里 純白黄平走りにして萬重平抱牡丹咲の大輪なり。  
 相生 淡紅管走り萬重平抱牡丹咲にして大輪なり。  
 明鳥 純白管走りにして萬重抱咲の大輪なり。  
 百千鳥 純白管走りにして萬重平抱牡丹咲の大輪なり。  
 新吉野 淡紅管走りにして萬重抱咲の大々輪なり。  
 瑞光 純黄管走り萬重平抱大々輪なり。  
 眞砂の月 純白純走り萬重抱咲にして大々輪なり。  
 黄金山 鮮黄管走り萬重抱牡丹咲の大々輪なり。  
 大和錦 紅管走りにして平抱萬重牡丹咲の大輪なり。  
 黄玉光 純黄管走りにして萬重抱咲の大輪なり。  
 春の都 淡紅管大走り萬重抱咲の大々輪なり。  
 盤城 極黄管大走り萬重抱咲の大々輪なり。



法 培 栽 花 菊

朝の雪 純白管走り萬重抱牡丹咲の大々輪なり。  
 稀寶 純黄管走り萬重抱咲にして大々輪なり。  
 青龍 青白管走りにして萬重抱咲の大輪なり。  
 金鏡 純黄管走り萬重抱牡丹咲の大輪なり。  
 白樂天 純白平走りにして萬重抱咲の大々輪を開く。  
 新高山 純白平走りにして萬重抱咲の大輪なり。  
 黄の司 純白走り萬重抱にして抱牡丹早咲の大輪なり。  
 雪の曙 醉白管走り抱牡丹咲にして大々輪なり。  
 黄金の司 純黄平走り萬重の牡丹咲にして大輪なり。  
 三國一 純白にして管走り平抱萬重の大々輪なり。  
 大山吹 金棒平瓣の萬重垂れ咲にして最大輪なり。  
 御裳川 櫻色管走りにして平瓣狂抱萬重の大々輪なり。  
 春景色 櫻色平瓣走りの抱萬重なる大輪なり。  
 雲龍 濃黄管長走りにして平瓣先抱卷千重最大なるものなり。  
 東天光 朱棒管大走りのし管にして大狂抱千重なり。  
 豊美の秋 淡紅管走りにして平抱萬重の最大輪なり。

法 培 栽 花 菊

帝玉冠 外含内黒の紅管長走平抱千重の最大輪なり。  
 蓬萊宮 紅大走り付抱の萬重重最にして大輪なりとす。  
 井出玉川 濃黄管走り平狂抱にして千重の最大輪なり。  
 峰の雪 純白走り付平抱にして萬重の最大輪なり。  
 花衣 外うつり色内藤紅大走り付のし瓣抱の千重大々輪なり。  
 寶の入舟 黄管走平抱にして萬重の最大輪なり。  
 富士 雪白走付平萬重にして盛上咲の大々輪なり。  
 蝦夷の雪 雪白大長走り付平萬重にして成上咲の最大輪なり。  
 千代の夢 外金内紅太管走平抱千重にして最大輪なり。  
 不老門 藤紅色の走付平狂抱千重にして最大輪なり。  
 産着の袖 淡紅平走りにして萬重平抱牡丹咲の大々輪なり。  
 黄金の里 純白管大走りにして萬重抱咲の最大輪なり。  
 唐衣 金紅の管大走りにして萬重抱咲の最大輪なり。  
 陸奥山 純黄管大走り萬重抱咲にして最大輪を開く。  
 雪山 純白管走り萬重抱咲の大々輪なり。  
 花牡丹 紅管走り萬重抱咲の大々輪なり。



法 培 栽 花 菊

九重錦 金紅平走りにして千重牡丹咲の最大輪なり。  
 四海波 純白平走りの萬重牡丹咲にして最大輪を開く。  
 逢萊山 純黄平走りにして萬重牡丹咲の大輪なり。  
 墨染の里 黒紅平走りにして千重抱牡丹咲にして最大輪を開く。  
 龍門 純白平走りにして萬重抱牡丹咲の大々輪なり。  
 見返櫻 淡紅平走りの萬重牡丹咲にして最大輪なり。  
 浅雪 純白平走りにして萬重牡丹咲にして大々輪なり。  
 朝日 淡紅管走りにして萬重抱咲の大々輪なり。  
 黄冠 純黄冠走りにして萬重にして大々輪なり。  
 霜被 純白平走りにして萬重なる牡丹咲を開く大々輪なり。  
 粧小町 淡紅管走りにして萬重抱咲にして大々輪を有す。  
 黃金玉 純棒走付細平瓣卷捻咲千輪なり。  
 晝夜錦 外白内紅走りにして抱八重の最大輪なり。  
 千里の春 抱千重咲にして淡紅走付の大輪なり。  
 大明錦 外金内緋紅管走りの大輪にして平抱重の花を開く。  
 十二重 外棒紅内黒緋紅走りの抱千重の大輪なり。

法 培 栽 花 菊

大榮 抱千重咲の大輪にして純黄平瓣太なり。  
 世界司 棒金大巾瓣の千重大輪なり。  
 春雨 平抱の千重咲にして白に紅の飛白縞の大きな花を開く。  
 戰勝 淡紅管走りにして萬重にして大輪の刺毛付なり。  
 花笠 淡紅管走りにして千重にして大々輪を有す。  
 朧月 純白なる平瓣にして抱千重咲の大輪なり。  
 日出鶴 本紅走付抱平瓣の萬重咲にして大輪なり。  
 龍の球 外棒内朱紅走付の平八重なる大々輪なり。  
 夜光の玉 朱紅瓣先金走付にして抱萬重の大輪なり。  
 白青龍 千重盛上咲の大輪にして純白平瓣の花を開く。  
 月の桂 大輪なる平抱にして外白内紅縞大太管走りになり。  
 碧雲臺 青色走り付の平大抱にして萬重の大々輪なり。  
 大白黄 白底照黄の走り付にして大平瓣千重最大輪なり。  
 沙河の譽 外金内朱紅管走りのし抱千重なる大輪なり。  
 譽の光 抱千重なる大輪にして紅棒大走りなり。  
 不老金 純黄管走の大輪にして平抱千重咲なり。



黒旋風 黒紅瓜舎の大走りにして抱千重の大々輪なり。  
 香爐峰 抱千重の最大輪にして赤鼠大太管走りなり。  
 小金の里 濃黄走付の平抱萬重なる大輪を開く。  
 動 籟 外金内紅管走りにして平抱萬重の大輪なり。  
 三千長 濃黄走付の平組抱千重にして早咲の大々輪なり。  
 帝の御旗 外金内紅なる八重大々輪なり。  
 松の月 平抱千重の大輪にして青白太管走りなり。  
 平安城 純黄大平瓣走付にして抱千重の大輪なり。  
 霜被衣 初め白色にして後紅色を帯ぶ大平瓣の抱千重の大輪なり。  
 大ふとり袖 濃黄走付の平抱千重の大々輪なり。  
 都美人 淡紅走付の平抱千重の大輪なり。  
 麒麟丸 外棒入交内紅の走付にして最大輪なり。  
 彌生の空 外金内紅の走付にして平抱千重の大々輪なり。  
 松 島 濃黄管走りにして千輪の大輪色々なり。  
 高津の雪 雪白大管走りの平抱にして八重の最大輪なり。  
 金剛の雪 白に紅棒系結管走りにして抱萬重の大輪なり。

瀧山金閣 濃黄走り付大抱萬抱の大々輪なり。  
 白帝王 平抱の千重大々輪にして純白大管走なり。  
 養老玉 白底淡紅ぼかしにして大平抱千重の大輪なり。  
 千古雪 雪白走付の盛上咲にして千重の大々輪なり。  
 司牡丹 醉白平瓣にして大抱の千重大々輪なり。  
 玉津島 千重の盛上咲にして醉白短太管の大輪なり。  
 玉 風 大抱千重の大輪にして紅棒平瓣の花を開く。  
 寒夜鷹 藤紅大平瓣走りにして抱千重の最大輪なり。  
 雲 錦 平瓣抱千重の大々輪にして白淡紅入の花を開く。  
 洋行錦 黄に紅棒入交りの抱八重の最大輪なり。  
 紅牡丹 千重の平抱大々輪にして本紅なり。  
 嵐 山 八重蓮咲の大輪にして櫻色平瓣なり。  
 安宅閣 淡紫走付にして千重の平抱の大々輪なり。  
 月宮殿 抱萬重の大輪にして純白走りなり。  
 名月山 平抱千重の大輪にして櫻色平走りなり。  
 鳳凰殿 淡黄走付の大輪にして抱萬重抱なり。



法 培 栽 花 菊

入舟 白に紅縹の走り付にして抱千重の大輪なり。  
 小錦 外白内紅の平瓣にして八重の中輪なり。  
 梢の秋 抱千重咲の大輪にして紅樺太管走りの花を開く。  
 寶舟 樺茶に紅縹走付にして平抱千重の大輪なり。  
 蓬萊閣 大平抱千重最大輪にして外銀内紅の花を生ず。  
 渚の月 抱萬抱の大重にして雪白走りなり。  
 七越 淡黄走付にして平抱千重の大輪なり。  
 都絞り 紅に白絞り走付の平瓣にして抱千重の大々輪なり。  
 御狩土産 純黄走り付にして平抱千重の大々輪なり。  
 茶牡丹 抱千重の大輪にして樺茶平瓣の花を開く。  
 龍の玉 白平瓣々先巻抱千重にして大輪なり。  
 白銀丸 白走り付平瓣にして抱千重の大々輪なり。  
 生野の里 抱千重の大々輪にして純黄平瓣なり。  
 夕景色 平瓣垂れ咲遅れ咲にして美紅に白縹を有せり。  
 今高砂 肉色太管走りにして盛上咲の萬重大々輪なり。  
 金花山 平瓣抱千重の最大輪にして純黄太管走りなり。

法 培 栽 花 菊

雲上鶴 薄色の太管走りにして平抱千重の最大輪なり。  
 嵯峨春 平瓣抱千重大輪にして櫻色太走りなり。  
 昇龍 純白のし太管巻狂抱千重の大輪なり。  
 金山鳳 外金内緋の太平瓣走り平瓣千重の大々輪なり。  
 眉山曙 櫻色太平瓣の大抱にして千重の最大輪なり。  
 孔雀舞 外金内紅太管走り平抱萬重の大々輪なり。  
 蟠龍 黄に樺縹大平瓣にして大抱八重の最大輪なり。  
 日出鶴 紅無地大走りにして平瓣抱千重の大々輪なり。  
 暮の雪 醉白管走のし瓣抱萬重にして大々輪なり。  
 花曇 白に淡紋り太平巻抱にして千重の大輪なり。  
 小町 外銀内紅の平瓣大抱にして千重の大輪なり。  
 小紫川 紫紅平瓣にして大抱千重の大々輪なり。  
 碧雲臺 青色走付にして平大抱萬重の大々輪なり。  
 君ヶ代 梅紅管さじ瓣抱千重の大々輪なり。  
 天ヶ下 雪白の管瓜抱へ千重にして尖り有る最大輪なり。  
 龍の立浪 雪白の大管にして尖り有る大輪の八重なり。



黃金榮 極黄の大管匙八重の極大々輪なり。  
 朝日の浪 薄紅の管千里の浪咲大々輪なり。  
 蜀江錦 内金にして外緋なる抱咲きにして八重の大輪なり。  
 田毎の月 純白の管匙中抱八重の大輪なり。  
 紫雲龍 薄色の大匙八重の早咲の太々輪なり。  
 延命の鶴 金茶の細管八重咲の大々輪なり。  
 萬花の長 純黄の管匙八重の大々輪なり。  
 園の譽 純黄の外管垂に内匙八重の大々輪なり。  
 平安城 金色の八重毛刺の大輪なり。  
 東雲 薄色の管匙八重の大々輪なり。  
 司錦 純白の赤半筒瓣千重の大々輪なり。  
 秋時雨 外銀の内紫平瓣八重の大輪なり。  
 金彩 金茶色の紅條八重の立咲の大々輪なり。  
 銀御所 錫色の薄紫ホカヤ千重玉咲の最大輪なり。  
 其の他尙左の數種あり  
 錦木 雨乞小町 晴の松 折鶴 獅子冠

雲の月 彩雲波 紅葉狩 八千代鶴 花娘  
 月の譽 翁 小夜時雨 富士氷柱 滋賀郡  
 蝦夷錦

管咲の部

一、太管咲

羽衣の曲 純白にして總管萬重の總玉巻段咲抱なり最大輪の美見なるものなり。  
 岩越波 雪白總管の萬重總玉にして巻抱最大輪なり。  
 花自慢 本紅總管走りにして萬重總玉巻最大輪貴品なり。  
 千代田雪 純白管走りにして千重八抱咲の最大美事なるものなり。  
 瑞勢 千重段咲にして純黄總管總玉巻の美事なる花を開く。  
 霞不二 外白内銀紅縞の大長走りにして抱千重最大輪なり(特に花大)  
 太陽 美紅走りにして抱萬重の最大輪なり。  
 青白上 純白大走り抱千重の大輪なり。  
 初瀬 純白大走りにして萬重の大輪を開く。



宇宙司 抱千重の大々輪にして純黄大走りなり。  
 萬代 黄棒管走り萬重抱玉巻の大々輪なり。  
 夕榮 千重段咲の大々輪にして淡紅總管走りなり。  
 鉢の木 萬重管抱段咲の大輪にして純白管走りなり。  
 五大洲 純黄總管玉管巻千重段咲の大々輪なり。  
 三笠 金棒總管巻千重段咲にして最大輪なり。  
 春夜の宴 千重段咲の大々輪にして青白總管なり。  
 新玉川 純黄總玉巻の萬重段咲にして最大輪なり。  
 美如玉 最大輪の千重抱咲にして淡紅管走り美見なるものなり。  
 新壽 千重總玉巻大々輪にして淡黄の管走りなり。  
 伏虎の峰 抱萬重段咲の最大輪にして淡紅總管なり。  
 國の譽 見事なる千重抱咲の大々輪にして淡紅管走りなり。  
 黄の梅 大輪の見事なるものにして純黄總管總玉巻重段咲なり。  
 曙の月 千重抱咲の大輪にして肉色管走なり。  
 金鳳樓 萬重段咲の最大輪にして極黄總管なり。  
 高麗錦 抱萬重の最大輪にして紅棒管先金の走りなり。

大冠 淡紅大長走りの巻抱千重にして大輪なり。  
 陶瀟明 純白大走さじ管抱萬重の大輪なり。  
 雲ヶ峰 抱萬重の大輪にして純白大走りなり。  
 松上の鶴 純白總管玉巻段咲の大々輪なり。  
 錦波 純黄總管にして千重段咲の大々輪なり。  
 加茂川晒 千重段咲の大輪にして純白總管先玉の花を開く。  
 太平洋 千重抱の大々輪にして純白管走なり。  
 黄金波 大輪の千重抱段咲にして純黄管走なり。  
 磯千鳥 純白管千重の段咲にして大々輪なり。  
 千重の波 千重抱段咲の大輪にして純白管走なり。  
 美女姿 千重玉巻段咲にして淡紅管走なり。  
 芙蓉峰 純白總管走りにして千重の段咲なり。  
 吹上の濱 千重抱段咲の大輪にして純白管走なり。  
 小笹の雪 萬重段咲の最大輪にして純白總管走りなり。  
 電光 淡紅總管玉巻にして萬重段咲の最大輪の見事なるものなり。  
 都鳥 萬重抱段咲の大々輪にして淡黄總管走なり。



法 培 栽 花 菊

新丹頂 肉色管走りにして萬重抱咲大々輪なり。  
 初日蔭 純黄管走りにして玉巻千重段咲の大々輪なり。  
 金孔雀 金樺管走りにして千重抱咲の大輪なり。  
 稀寶 濃黄走りにして抱千重の大々輪なり。  
 醉楊妃 抱千重の最大輪にして淡紅大走りなり。  
 黄金鶴 純黄大走りにして千重の最大輪なり。  
 長月 淡黄大長走りにして千重の大輪なり。  
 登り龍 紅樺大長走りにして千重の最大輪なり。  
 敷島 紅鼠大長々走りにして千重の最大輪なり。  
 天ヶ下 純白走抱さじ瓣千重最大輪なり。  
 初雁 紅樺走りにして抱千重の最大輪なり。  
 浪間の月 銀色大走にして抱千重の最大輪なり。  
 浪間の照 千重平抱咲にして淡紅管走なる最大輪なり。  
 黄龍 千重玉巻段咲にして純黄管走りの最大輪なり。  
 龍立波 大輪の雪白管走りにして千重抱咲なり。  
 笑大眞 最大輪の萬重咲にして淡紅樺管走りにして千重抱咲なり。

法 培 栽 花 菊

美女の舞 抱千重の最大輪の見事なるものにして紅管走りにして大輪なり。  
 紫玉勢 玉巻千重抱咲の紅管走りにして大輪なり。  
 六歌仙 醉白大長走りの大輪にして抱千重咲なり。  
 虎遊 紅樺走りの千重の大々輪なり。  
 越ヶ蜂 青白大走りにして千重の大輪なり。  
 黄劔龍 千重の大々輪にして黄瓣先龍口なり。  
 青面山 抱萬重大輪にして青黄走りなり。  
 春日人 純白千重の大輪なり。  
 紫光 抱千重の大輪にして黒紫走りなり。  
 白玉管 萬重の醉白にして大輪なり。  
 幾千代 大抱千重の大輪にして淡紅大走りなり。  
 羽衣 抱千重の大輪にして美紅瓣先白のし瓣走りなり。  
 玉椿 櫻色走りにして抱千重大輪の早咲なり。  
 都の黄 抱千重最大輪にして淡黄大走りなり。  
 帝錦 金樺大走にして抱千重の最大輪なり。  
 ライオン 黄短管萬重にして盛上咲の大々輪なり。



法 培 栽 花 菊

越の雪 雪白大走りにして千重の最大輪なり。  
 青葉笛 純白八重長瓣の最大輪なり茶り。  
 小倉山 椿茶走り抱千重にして大輪を開く。  
 竹筵 萬重の純黄なる大々輪なり。  
 四海晴 青白走り抱千重にして大輪なり。  
 白帝城 純白走抱千重の最大輪なり。  
 豊艶 金椿千重の大輪なり。  
 皇國一 櫻色大走りにして抱千重の大輪なり。  
 藤の戸 藤紅大走りにして抱千重の大輪なり。  
 日光殿 本紅走り千重の最大輪なり。  
 東雲龍 櫻色大走り大抱千重の大輪なり。  
 奈良の都 大抱千重の大輪にして櫻色大走りなり。  
 御代の春 千重段咲の淡紅管走りの大輪なり。  
 櫻鏡 淡紅管走り萬重段咲の大々輪なり。  
 朝日龍 紅管走り純玉巻にして萬黄段咲の大輪なり。  
 吉野山 淡紅管走り千重抱咲なる大々輪なり。

法 培 栽 花 菊

猩々舞 本紅管走りにして千重抱咲の大輪なり。  
 友白髪 純白管走り千重抱咲の大々輪なり。  
 唐子舞 淡紅管走りにして萬重の最大輪なり。  
 白勢管 純白總管走りにして千輪段咲の最大輪なり。  
 新小町 淡紅管走り玉巻段咲の大々輪なり。  
 天津風 純白管走りにして千重段咲の大輪なり。  
 高千穂 黄管走りにして萬輪の大輪なり。  
 八方紅 濃紅管走り大抱千重の大輪なり。  
 俄雨 椿茶管走り大抱萬重の大々輪なり。  
 玉龜 黄椿管走りにして抱千重段咲の大輪なり。  
 白露錦 純白管走りにして千重段咲の大々輪なり。  
 双鴛鴦 銀紅大走り付にして大盛上抱千重の大輪なり。  
 岩戸光 紅鼠の大走りにして大抱千重の大輪なり。  
 唐子舞 淡紅大走り盛上抱千重にして大輪なり。  
 秋の薫 白に藤紅大走りにして大抱千重の大輪なり。  
 華の錦 淡接色大走りにして大抱萬重の大輪なり。



天地開 本紅大走りにして巻抱千重の大輪なり。  
還城樂 外銀鼠内紅大走りの管にして抱千重大輪なり。

二間 管 咲

銀世界 青色の走付にして抱千重最大輪なり花形優美なり。

三芳野 美紅瓣先白走りにして抱千重の大輪美麗なり。

白鳳 純白の大走りにして抱萬の最大輪なり。

翠月 醉白の大走りにして玉巻萬重の最大輪なり。

雪の光 白細管の千重大輪なり。

宇宙龍 金棒に生入走り巻抱千重の大々輪なり。

黃雲勢 金棒長々瓣千重最大輪なり。

天の浮橋 銀紅大走り抱千重にして大々輪なり。

獅子頂 外紅棒内紅走付にして巻千重大々輪なり。

翁龍 醉白大走りにして玉巻抱萬重の大輪なり。

尙和殿 濃黄走りにして抱八重の大々輪なり。

門田の月 青白八重大長管にして始まる花なり大輪とす。

ひけの玉 淡黄走りにして抱千重の大輪なり。

濱萩 紅鼠大走りにして抱重の大々輪なり。

乙女の粧 白内綴色の大走のし管にして抱千重の大々輪なり。

翁獅子 白のし管千重大輪なり。

旭濤波 金紫棒先金にして千重狂抱の大々輪なり。

夕照 外紅内朱紅走付にして抱千重の大々輪なり。

黃の譽 純黄走り付にして大抱千重の大々輪なり。

紫雲勢 紅紫走り抱八重にして大輪なり。

若武者 美紅走り付けにして抱萬重の最大輪の美麗なるものなり。

白雲峰 白管にして先總玉巻段咲の大輪なり。

若緑 紅紫走りにして千重の大輪なり。

都の舞 美紅走り抱千重の大々輪なり。

猩々遊 本紅のし管にして千重長瓣の大輪なり。

冠の紐 紅大長狂瓣にして千重の大輪なり。

豊の明 黄に棒編管走のし管にして大抱千重大々輪なり。

老の波 白玉巻段咲にして大輪なり。

萩の露 銀管先玉巻大輪なり。



法 培 栽 花 菊

黄玉殿 黄管走り抱咲にして大輪なり。  
 笑小町 淡紅走りにして段咲の大輪なり。  
 白瀧 白管走り玉巻の大輪なり。  
 玉光 金棒管走りにして玉巻の大輪なり。  
 玉緑 銀管走りにして玉巻大輪なり。  
 京美人 淡紅にして段咲の大輪なり。  
 金龍司 純黄の段咲にして大輪なり。  
 鳳凰冠 金棒管走りにして抱咲の大輪なり。  
 昇天龍 白管走り抱咲にして最大輪なり。  
 見驚田 純黄の大長走りにして大抱萬重の最大輪なり。  
 毎田二 雪白大走りにして大抱千重の大輪なり。  
 揚卷 黄に紅朱縹の大走りのし管にして抱千重美事なり。  
 三細管咲  
 御衣裳 紅總管萬重管の先黄にして段咲の大輪なり。  
 比翼 紅管總玉にして巻萬重管の先黄段咲の大輪なり。  
 龍初冠 淡紅管總玉巻萬重段咲の大輪なり。

法 培 栽 花 菊

白龍冠 純白管にして總玉巻萬重段咲の最大輪なり。  
 黄雲閣 純黄大走りにして玉管萬重なる大輪なり。  
 鳳凰舞 濃黄玉巻萬重の大輪なり。  
 九重簾 淡紫管の總玉巻管先白の千重段咲の大輪なり。  
 黄雲龍 純黄千重の大輪なり。  
 園の司 純白走り巻抱八重大々輪なり。  
 玉籠 樺藤色の大走りにして玉巻抱萬重大々輪なり。  
 金世翠 純黄管總玉巻萬重の大輪なり。  
 雪の光 純白管にして玉巻千重段咲の大輪なり。  
 花の峰 淡紫管にして玉巻管先黄の千重咲の大輪なり。  
 鳳凰 銀管にして總玉巻千重の大輪の見事なるものなり。  
 吹雪の松 純白管にして玉巻千重の最大輪なり。  
 明治の譽 藤紅長々瓣にして千重の大輪なり。  
 一去一來 外銀鼠内美紅大走にして玉巻萬重最大なるものなり。  
 翁遊 醉白針管にして萬重の大々輪なり。  
 還城樂 醉白大走りにして抱萬重の最大輪なり。



黄勢龍 純黄走りにして抱萬重の最大輪なり。  
 黄金松 濃黄針管萬重の大輪なり。  
 冠上の鶴 藤紅針毛付走りにして抱千重の大々輪なり。  
 月の光 純白走りにして大抱千重の大輪なり。  
 孔雀の舞 金棒大長走玉巻にして抱千重大々輪なり。  
 常盤錦 櫻紅走付にして大抱萬重の大輪なり。  
 九尾 外金茶内緋紅針管走りにして大抱萬重なり。  
 最中の月 純白走りにして抱萬重の大輪なり。  
 新桃園 銀鼠毛付走りにして抱千重の大々輪なり。  
 隠笠 純黄管にして玉巻千重段咲の大輪なり。  
 高砂 純白管にして玉巻千重大輪なり。  
 伏家 純黄管走りにして玉巻千重の大輪なり。  
 雪の波 淡紫管にして玉巻管の先黄千重の大輪なり。  
 見鷺 極黄管玉にして巻萬重咲の大なり。  
 金鷄司 輪純黄管總玉巻萬重の大輪にして見事なり。  
 玉取司 金棒管總玉巻萬重にして大輪なり。

沖津波 純白管玉巻の千重段咲にして大輪なり。  
 仙人柳 純黄管走りにして玉巻千重段咲大々輪なり。  
 諏訪の海 醉白大走抱千重最大輪なり。  
 金孔雀 金棒走付玉巻萬重の大輪なり。  
 小町姫 醉白針管にして千重の大々輪なり。  
 姥櫻 櫻紅針管走りにして抱萬重の最大輪なり。  
 琴の糸 純濃黄千重にして大輪なり。  
 螢影 金棒大走りにして八重の大々輪なり。  
 糸引の瀧 純黄針管にして千重の大輪なり。  
 越路の秋 雪白走りにして抱千重大々輪なり。  
 老松 黄短管瓣萬重大輪なり。  
 富士龍 醉白大走りにして巻抱千重の大々輪なり。  
 狂亂雀 金棒針管走りにして狂抱千重大々輪なり。  
 深夜の月 紅棒一重の大輪なり。  
 雪柳 白に紅飛白大走りにして千重の大輪なり。  
 驛路の鈴 醉白大走りにして抱千重大々輪なり。



初時雨 白内紅縞大走りの管抱千重の大輪なり。  
 雨後の月 酔白大走りにして抱千重の最大輪なり。  
 櫻化粧 櫻色瓣先白大走り管抱千重大輪なり。  
 樺 樺管走り玉巻千輪の最大輪なり。  
 井出の月 淡黄管走にして玉巻千輪の最大輪なり。  
 金糸龍 純黄管玉巻にして千重の大輪なり。  
 御代鶴 淡紅管玉巻にして千重の大輪なり。  
 銚 木紅管玉巻にして千重の大輪なり。

四針 管 咲

霜夜の月 白の極細管二三重極く大輪なり。  
 富士の曙 紅紫の極細にして二三重の大々輪なり。  
 玉 翠 白黄の極細管二三重の大々輪なり。  
 嚴 島 金紅の極細管にして二三重極く大々輪なり。  
 緋の司 木緋の極細管にして二三重の大々輪なり。  
 漣 浪 雪白の極細管先巻にして二三重の大々輪なり。

其他太管間管細管針管の諸種と麗美を争ふ管咲の類に左の品種あり。

雛 鶴 金 龍 白 糸 漣 梅 の 尾 白 妙  
 和 歌 浦

狂 咲 の 部

美人競 淡櫻色走付平大狂にして抱萬重最大輪なり。  
 電燈籠 白に水榭ばかり走付平狂抱の大輪なり。  
 吉野の春 櫻色走付大狂千重の大輪なり。  
 遠山錦 朱榭平巻狂抱千重の大々輪なり。  
 時雨山 榭茶内黒紅走付平狂抱の千重大輪なり。  
 黄金獅子 純黄走付にして平瓣狂千重の大々輪なり。  
 旭日鶴 淡紅走り付にして千重の大々輪なり。  
 花王殿 外白内濃紅走付にして狂抱萬重の大輪なり。  
 白雲龍 純白走り付にして平狂千重の大輪なり。  
 緋の袴 朱紅平瓣狂抱千重の大々輪なり(色無類)  
 組上錦 白に美紅縞平瓣狂抱にして千重の大輪なり。  
 宿の一本 外白内紅さじ瓣萬重の大輪なり。



薄紅葉 醉白大走りにして平狂抱重の大輪なり。  
 玉の冠 金茶内棒縞のし狂抱千重の大輪なり。  
 千尋の波 白茶色走りにして狂抱千重の大々輪なり。  
 鬼面 外茶内紅棒走り付にして狂抱千重大輪なり。  
 春遊 櫻色のし瓣付にして狂抱千重の大輪なり。  
 金玉殿 純黄のし瓣抱千重の大輪なり。  
 蜀光錦 外金内緋紅狂抱の千重の大輪なり。  
 紅小町 本濃紅走り付にして狂抱八重の大輪の色無類なり。  
 月の俤 純白平瓣大狂抱の千重の大々輪なり。  
 一葉の秋 醉白平瓣大割にして狂抱千重の大々輪なり。  
 松の雪 雪白管大走にして平狂卷抱千重の大輪なり。  
 古代の寶 朱棒瓣先金中平瓣狂抱千重咲の大輪なり。  
 立田川 淡黄平細瓣にして大狂卷の千重の大輪なり。  
 東の春 淡櫻色平細にして千重の大狂中輪なり。  
 寶球 紅棒瓣先金細千重中輪なり。  
 七二千 黄大平瓣千重狂抱にして大輪なり。

化粧の水 白に薄化粧細平狂抱の中輪なり。  
 花籠 桃色平大狂抱にして千重の中輪なり。  
 勢獅子 黄管走りにして平抱狂千重の大輪なり。  
 秋の雲 白管走りにして平抱千重の大輪なり。  
 町保野 淡櫻色にして大平瓣抱千重の大輪なり。  
 浪の花 純白にして平瓣大狂抱千重の大輪なり。  
 神代良 黄底棒走り付にして大狂抱千重の大輪なり。  
 風車 白に肉色入平瓣の大狂にして抱千重の大輪なり。  
 紅小町 本紅大走平大狂にして抱千重の大々輪なり。  
 千金梅 濃黄のし瓣大狂にして千重の大輪なり。  
 萩下露 薄櫻色の管走りにして平大狂抱の大々輪なり。  
 朝日の鶴 淡紅大平瓣大狂抱にして千重の大輪なり。  
 金王殿 純黄のし瓣抱千重にして大輪なり。  
 芙蓉峰 雪白の狂上々大輪なり。  
 玉章 濃黄の本狂の大々輪なり。  
 紫雲閣 紫色の露心狂大々輪なり。



山陽春 鴉色に薄紫縞本狂ひの大々輪なり。  
 黄金の里 純黄の本狂ひ大輪なり。  
 静女の舞 桃色の本狂の大輪なり。  
 勿來の關 薄色の露心狂大輪なり。  
 櫻 返 鴉色の紫條紫ボカシ本狂の大輪なり。  
 十目十指 外黄の内赤露心なる本狂なり。  
 宿の一本 紅紫の本狂の大輪なり。  
 水晶宮 水晶の白本狂の大輪なり。  
 玉樹後庭 雪白の露心狂の大々輪なり。  
 和氏の涙 純黄の自然狂にして大輪なり。  
 桃 林 薄紫の露心狂大輪なり。

其の他左の品種あり。

積る電

酒中の舞

奈良都

周茂叔

一文字咲の部

古今欄 紅地に黄更紗鮮明大巾にして十五六瓣の見事なり。  
 紀念 純白にして大巾十五六瓣の見事なり。  
 御 簀 白地に内紅堅縞大巾十五六の瓣見事なり。  
 日本譽 純黄の大巾にして十四五瓣の見事なるものなり。  
 一天四海 薄紫の匙管交瓜の大抱無類の大輪なり。  
 紫 龍 薄紅の中管最大々輪なり。  
 伊達鏡 外棒の内縞ボカシ極大輪なり。  
 鷹の瓜 外銀の内紅細管極大々輪なり。  
 深山の雪 白黄の匙管大々輪なり。  
 八代の浦 外銀内の薄色太管の大々輪なり。  
 小 紫 薄紫の太匙大々輪なり。  
 黄江梁 純黄の中管大々輪なり。  
 春江一葉 内銀の外薄紫細管にして大々輪の花を開く。  
 長 船 白地に紫縞太大大々輪なり。  
 雪 晃 純白大巾にして十五六瓣の見事なり。  
 梅 錦 紅白に黄更紗大巾にして鮮明十五六瓣の美事なるものなり。



法 培 栽 花 菊

花吹雪 白地に紅立縞にして大巾十四五瓣の見事なるものなり。  
 東陽錦 紫大巾にして十五四瓣に見事なるものなり。  
 薫雪 純白の大巾にして十四五瓣を付す。  
 花の宴 白地に赤更紗縞の大巾にして十五六瓣の美見なるものなり。  
 錦波 黄地の紅縞縞にして大巾なる十四五瓣を付す。  
 朝陽錦 黄地に紅更紗大巾にして十五四瓣なり。  
 見越紅葉 洗朱更紗の大巾にして十四五瓣を附す。  
 式部勺 外銀内紅にして大巾の十四五瓣なり。  
 黄金榮 純黄紅立の十四五瓣なり。  
 湯上り姿 白地に大巾縞にして大巾十五四瓣なり。  
 鶴齡 純白大巾の十六七瓣を有す。  
 玉の海 外銀内黒紅の大巾にして十五六瓣なり。  
 夕紅葉 純黄地に内紅縞縞大巾の十五六瓣なり。  
 萬里の春 肉色大巾にして十五六瓣の見事なるものなり。  
 譽 純黄大巾にして十六七瓣の見事なり。  
 艶姿 紅大巾にして十五六瓣を附す。

法 培 栽 花 菊

聖代 純白にして大巾の十四五瓣を有す。  
 慶賀 純黄大巾にして十五六瓣の見事なるものなり。  
 初花 外銀内縞の縞縞にして大巾十四五瓣なり。  
 金鳳 外黄内紅の大巾にして十六七瓣なり。  
 千代の友 白地に紅更紗の大巾にして十五六瓣なり。  
 天羽衣 外銀内紅更紗の大巾にして十五六瓣なり。  
 麟鳳 素大にして十四五瓣の見事なるものなり。  
 旭の空 外白内紅縞縞大巾十五六瓣なり。  
 月世界 外白内紅の大巾にして十七八瓣なり。  
 金冠 純黄大巾にして十七八瓣なり。  
 貴玉 純黄にして大なる十六七瓣なり。  
 曲水の宴 白地に紅縞縞の十五六瓣なり。  
 朝日の波 白地に縞縞十五六瓣の見事なるものなり。  
 雪橋 純白大巾にして十五六瓣なり。  
 錦司 金紅大巾にして十六七瓣なり。  
 文明 白地に紅縞大巾にして十六七瓣なり。



法 培 栽 花 菊

月の光 雪白の大巾にして十四五瓣なり。  
 外山霞 白地に淡紅豎縞の大巾にして十六七瓣なり。  
 日光晴 純白大巾にして十六七瓣なり。  
 霞が浦 白地に紅豎縞大巾十四五瓣の大巾にして見事なるものなり。  
 嵯峨の春 肉色地に淡紅豎縞大巾にして十五六瓣なり。  
 銀雲龍 外銀内紅の大巾にして十五六瓣なり。  
 神風 純白の大巾にして十六七瓣なり。  
 御代の譽 純黄にして大巾の十六七瓣なり。  
 紫雲龍 外白内紫なり。  
 金光龍 黄に朱紅棒縞の大巾なり。  
 淵明錦 外金内朱紅の大巾なり。  
 濡れ鳥 外うつり色内黒紅なり。  
 錦の露 外金棒内黒朱紅の大巾なり。  
 錦の御旗 外うつり内紅豎縞なり。  
 旗玉の臺 外うつり色美紅色なり。  
 金世界 洗朱縞の十七八瓣なり。

法 培 栽 花 菊

初霞 淡紅の十六七瓣なり。  
 綾錦 金紅十七八瓣なり。  
 芦の友 桿色の十五六瓣なり。  
 紫雲閣 紫十七八瓣なり。  
 薄櫻 淡紅の十七八瓣なり。  
 萬代 純黄大巾の十七八瓣なり。  
 雪の月 純白の十七八瓣なり。  
 大龍 濃黄紫大巾の十五六瓣なり。  
 長樂 薄紅大巾十五六瓣なり。  
 嫦娥 純白大巾十六七瓣なり。  
 錦島 外銀内紅縞十七八瓣なり。  
 龍玉 外彩色内本紅太巾なる十五七瓣なり。  
 夜光玉 純白大巾十六七瓣なり。  
 春花 桿色にして大巾の十六七瓣なり。  
 かすみ 純白に紅縞厚輪の大巾の十六七瓣なり。



丁字咲の部

群丁二 紫の大丁字咲なり。  
 百千鳥 薄紅の垂瓣にして大丁字をなす。  
 貴公子 本紅にして大輪なり。  
 紫丁子 紫色の大輪なり。  
 島臺 大輪の鴉色なり。  
 御旗錦 棒に紅縞の六丁字をなす。  
 黄丁子 黄色にして大輪を咲く。  
 樺丁子 樺子の大丁字咲なり。  
 國丁字 長針の丁字咲にして純黄なれど外部の一二瓣棒紫を呈す。  
 紅丁字 紅色八重の十字咲の大輪なり。  
 源平丁字 内紅外銀の大ぬれ瓣にして紅白互に入り亂れ中輪珍貴なるものなり。  
 關屋の浦 薄櫻色の大丁字なり。

其の尙之等と美を競ふものには左の種あり。

絞り咲の部

大和錦 鮮黄地の本紅絞り露心の狂にして大輪なり。  
 友仙染 紅の白絞り平瓣一重の大々輪なり。  
 源平 白紅に染分け細よれ千重の大輪なり。  
 都錦 雪白の本紫絞咲き分け千重の大々輪なり。  
 瀧津瀬 薄紅の平匙瓜黄又た白八重抱咲大輪なり。  
 干網絞 白紫の染分け細よれ千重の大々輪なり。  
 縮緬鹿の子 縮緬地に黄星咲入千重の大々輪なり。  
 二光錦 黄に星紅入りにして千重のよれ咲なり。  
 金性星 朱色に黄絞り入千重の大輪なり。  
 金鷄鳥 裏金の表棒地に紅入筋絞りにして間管千重の大輪なり。

大廣殿 古付浦 朝日の空 白丁字  
 緋翠簾 操の鏡 思の儘 沖の白帆

沖の白浪 純白平瓣にして中輪なり内部稍黄色を帯ぶ。

尙左記の數種も絞り咲中の優品なりとす。



新大和錦  
奥山絞

都 錦

帝 國 錦

花の白浪

染分手綱

六十二

毬咲の部

世界の國

櫻色管の萬重の毬大々輪なり。

黃金國

金茶管の萬重毬咲の大々輪なり。

V黃金臺

純黃八重の大々輪なり。

獅子頭

外金管の赤匙平瓣交の毬咲の大々輪なり

V夜光の玉

花色紫の萬重管咲の大々輪なり。

白 玉

純白なれど外部の一々瓣紅色萬重毬咲の大輪なり。

其他尙名あるものに左の數種あり。

黃寶珠  
金剛石

京牡丹  
黃金丸

麟 鳳  
白蹄籠

化粧小町  
滄海珠

玉牡丹

珍品の部

りとす。

尙左に掲ぐるは近時菊培養家の間に持て囃されつゝある新種にして又珍品なり

男 山

蕾の時少く淡黄を呈すれども開花後には純白となり日を經るに従つて外は少く紅色を帯び萬重の太狂咲にして大々輪なり。内部は平瓣

遠山の曙

蕾時外部は紅色なれど開花すれば外は淡紫内部は純白となり。内部は平瓣なれど外部は肉管瓣を有し内抱の大輪牡丹咲に類す。

大上金

鮮黄色太管走咲の大々輪なり。

丈 競

細管咲にして淡紫色を呈し瓣先紅色ある千重の大々輪なり。

紫雲丸

白紫色の管咲にして淡咲に類する大々輪なり。種極めて少しと云ふ。

勝 関

大々狂にして其の花形恰も百合根の如し外銀内紅の管間狂咲の逸品なり。

加藤川染

白色の瓣先三分出せる瓣咲にして内紅外白千重の珍種なり。

大正の譽

内紅外銀にしてれづれ瓣千重大輪狂咲の最新傑なり。

第三節 品評十品

以上數千種の黃白紫紅千態萬様の菊花を品騰せんことは頗る困難の事業であるが品種の改良及十珍品養成を念とする人に取りては又頗る興味あり且つ必要なることであらうと思ふ故に茲には地錦抄中より品評十品を措載して之等の人々



の爲めに菊花の優劣を比較する際の参考資料に供しておく。

一、位置

花壇の位置は三四列となすべく、五列以上は不可なり凡花々相應する花頸を有せざるべからず。

二、花形

花形に大中小輪の別あり、瓣扁平なるもの充分に開かずして丁字咲のもの、反轉せるもの、一部分は高くして末端下せるものを上品とす。

三、色澤

菊花の色は主として、白花開花の初期は薄く他の色を交へ後に至りて純白となり光澤を帯ぶるものを可とし、始め白色を常び後に着色するものは上品の白色と稱すべからず、紅花は始め朱玉の如くにして次第に淡色となり、遂に眞の紅色を呈するものを上品とし、他の三色は鮮かなるを貴ぶ。

四、單重辨

花辨の一重なるものなり、三重なるものまで單重と稱し、四葩以上を八重といひ、雄蕊なきものをフキツメといふ。

五、花軸

花軸は花形に相應したるものみに生ずるものにあらすして細纖にして強剛なるものあり、長大にして強硬なるものあり、短大にして堅剛なるもの等種々あれども、細纖にして強剛なるものを尤もとす。

六、葉

菊花雄雌蕊には筒の如き圓筒形をなすものあり、丁字形をなせるものあり、ヤラフと稱するものは、長さ短くして並列するものを云ふ。

七、葩

菊花の花葩には厚薄あり、形正しくして、中凹なるあり、凸にして反轉するものあり、旋回するものあり、細長短大の別あり、圓筒形をなせる所謂筒咲なるものあり、矢車咲と稱し、元の部分圓筒形にして、先方竹を削りたるが如き狀をなすもの等あり、總て菊花の辨は狂咲にありては、一花中に筒辨半



筒辨扁平辨の三種を具備し花形不規則なるものを貴び一輪咲又は大菊にありては一種の辨よりなり花容豊大にして花色單純或は濃厚なるものを上品とし外國輸出向きには特に此の種多きが如し嵯峨菊と云ひ丁字咲と稱するものは一種の品位を有するものなり。

八、

時節 開花の期節に早中晩の別あり、何れを上品といふ能はざるも上品のものを貴ぶ。

九、

葉 菊の葉に大小圓長の別あり、缺刻に深淺あり厚薄あり色に淡綠濃綠の差あり缺刻多くして淡綠色を帯び強健なるを上品とす。

十、

草姿 菊の草姿には伸長著しきものあり短太にして多枝を發生するものあり、長さ中等にして細大相半するものを上品とす。

第四章 用土及肥料

古來菊花の培養管理の法に就ては、各人各様或は秘傳と云ひ或は口授と稱して、容易にその要訣を他に教へず、特に用土及肥料に就ては、斯道専門家の最も意を用ひ、又最も秘密とする所である併も數百年來絶えず研究されつゝあるにも拘らず、末だに確乎たる定説なきに徴しても、如何に用土及肥料の研究が菊花培養上に最も必要であり困難であるかを察することが出来やう、即ち之茲に一章を割き特に此の事項に就て實驗家の説に聞かんとする所以である。

第一節 用土

菊花を培養すべき土質は排水の佳良なる砂土と塵芥土に近いものを撰ぶべきは勿論であるが、尙美大優麗の花を得んとせば何うしても別に培土及び作土を準備せねばならぬ、其の周養の場合たと盆養の場合たとを問はず最も簡便容易なのは塵芥木葉等の腐化して土となつたもの赤土と真土とを等分に混和した作



法 培 栽 花 菊

士であるが尙實驗家の培土調製法二三を紹介しやう。

一、泥土 六分 腐葉土 二分 細砂 二分  
花壇一坪に付過磷酸石灰二百匁油粕一貫匁を與ふる

二、田土 四分 畑土 四分 川砂 二分  
過磷酸石灰油粕を加ふること前同様

以上兩法は大輪花を栽培するに適する用土である

三、真土 五分 砂 三分 黒土 二分  
四、田土 四分 砂 二分 畑土 二分 腐植土 二分

人糞を多肥して一ヶ月前に花壇を作る  
以上兩法は狂菊を作るに最も適して居る

五、又或る人の説によれば豫め肥沃の真土五分砂細一分塵土四分の割合に混交しおき之に過磷酸又は骨粉二百匁位と油粕一貫匁許りを一坪の量として海水に溶解せしめたるものを注ぎかけ此土を寒氣に曝露して春季接配したものが最も良好の用土であると云ふ尙又手数の煩を避けんとせば塵土と赤土と真土との

法 培 栽 花 菊

等量を交えたもの又は溝泥六分落葉腐熟土二分細砂二分の割合に混じたもの等も實際に用土として好結果を擧げて居る。

之を要するに以上數種の培土調製法何れが是何れが非なりと云ふことは出來ぬがよし一長一短あるにしても總て菊花培養土として適當なるのであることは儲である故に要は栽培すべき種類を自己の新案若くは經驗に徴して其の一を選ぶべきである。

余輩は最後に黃の園主人の土壤作成法なるものを紹介して本項を終ることにしやう。

土壤を作成するには輕鬆土と云つて塵芥土に近いもので排水の良いものを選びねばならぬ或は腐植壤土に多少の藁灰と砂とを混じたるものなれば更に良好である此の土壤が出來たら日光に乾燥させて篩にかけ其の中の木片石塊等を除き幾度も日光に當て露にも晒し十分土質を柔軟にしないでならぬ又寒暑にも曝して害虫の發生を防ぎ且つ二三回人糞を混じ肥料小屋に堆積して雨露に觸れぬやう十分の保護をなし翌年に至つて使用するのである又置肥となすべきもの



は前記の土壤中は油槽及び糠等を混じて堆積するのであるが此の準備としては  
使用前二三ヶ月頃に作成するのである其の混合の量を擧ぐれば土壤二升油槽一  
升米槽一升を十分混合し且つ醱酵せしめて使用するものである若し醱酵せざる時  
は中を少し掘りて如露にて給水し再び堆積し置けば必ず醱酵するものである。

第二節 肥料

肥料も亦用土と同じく古來區々の説あり人によつて一様でない即ち或は油槽  
を第一となすものもあれば又乾燥を優等なりと云い豆糟を最良なりと言ふもの  
もある併し如何に効顯あればとて油槽のみを施す時は葉の光澤は宜いが小形に  
なつて硬變し易き恐れがあり又乾鰯のみを施せば肥大にすぎず姿勢亂雑になる  
の憂がある故に適宜斟酌して配合其の當を得濃厚に失せず稀薄にすぎず過不足  
なき様施肥することが最も肝要であるされど余輩私かに思ふに菊花には諸種の  
肥料を用ふるよりも却つて在來の人糞に油槽の混じたものが價格も廉に効能も  
著しい様である若し又出來得べくんば油粕に乾鰯を混じたものが最も望ましい

のである。

さて菊花の肥料に對する著者の意見は以上の通りであるが大體に於て菊の肥  
料は之を水肥として準備するものと土に混合して所謂培養土を作るとの二つに  
大別することが出來る其の培養土即ち作土の調整法に就ては前節に於て陳べて

おいたから茲には専ら實驗家の水肥の製法二三をお傳授しやう。

一 過磷酸石灰一升到油粕の粉狀となつたもの五合を糞又は桶に入れて之に眞  
水一斗五升を混合して腐敗せしめ混合の時より約二週間以上も經過してからそ  
の上清の養分を汲み取りて眞水と混合するもの

二 肥料の主要分たる粕油糟大豆粕等を金割に配合せしものを水肥にするが

よい各壺圓宛又は五十錢宛買取り均しく配合して水肥となしたるもの其の方法  
は各肥料五十錢位宛買取り之を四斗樽に入れ眞水を一杯入れて十分醱酵を促  
し全く腐敗せしもの上清を更に稀薄となし施肥するのである實例に徴すれば

肥料準備は使用前一寒又は二暑を経たるものの方がよろしいから準備の際は糞  
又は四斗樽に入れて堅固なる蓋を設けて養分の散逸を防がねばならぬ



三最も簡易なのは人糞約一升に水一斗を混合したるものこの肥料は少し時日を経過した方がよい又油粕一升に水一斗を混合したもの、上清を汲み取つて水に割り能く攪拌して使用してもよろしい

●施肥上の注意 水肥の製法中主なるものは先述の通りであるが以下少しく施肥上の注意に就て述べておく

一肥料を施すには葉面に肥料を注ぎかけぬ様注意せねばならぬ若し不注意の爲めに葉面に水肥又は其の他の肥料など附着する時は植物成育上必須なる葉に於ける蒸發作用呼吸作用及び同化作用等の機能を妨害し且つ附着物の爲めに痛く機械的の害を受くる事が多い従つて葉を枯凋せしむるか又は脱落せしむる等の憂を生ずるが故に觀賞上最も重要視せらるゝ所の葉莖等の自然的風致をも減却するに至るものである

二肥料は濃厚なものをを用ひてはならぬ若し之を用ふる時は其の失敗取り返しのつかぬ事になるものである故に成るべく稀薄なものを使用する様に注意すべきである彼の葉裏に黒星又は白星が出来たり或は葉莖等が偶然萎縮性に陥るや

うの事あるは、一種の病的にもよるが時としては肥料の濃厚なるものを與ふるより之等の害を惹き起すこともあるから施肥の際はよく注意せねばならぬことは秋香會の千葉氏の談であつた。

|                 |                 |       |
|-----------------|-----------------|-------|
| おく霜の染めまどはせる菊の花は | いづれかまとの色にはあつける。 | (實之)  |
| 秋風の吹上げに立てる白菊は   | 花かあらぬか波のよするか。   | (管家)  |
| 濡れて折る霜の月影ふけにけり  | まがきの菊の花の上の露     | (實朝)  |
| 萬代も霜にも枯れぬ白菊を    | 後やすくもかさしつるかな。   | (伊衡)  |
| 欠方の雲の上にて見る菊は    | 天津星とぞあやまたれぬ。    | (古今集) |



第五章 園養法

菊花培養の方法は各人各様千差萬別であるが之を要するに花壇作りと鉢植作り即ち園養と盆養との二途に出でないのである本章に於ては順序として先づ花壇作りの方法より述ぶることにしやう。

第一節 花壇

菊花を庭園に栽植して觀賞せんには先づ花壇を設けねばならぬ花壇の構造は種類仕立方法及び培養者の趣味嗜好等によりて一様でないから一概に言ふことは出来ぬが諸先輩の経験談其の他を總合して最も信頼すべき花壇の研究を記載しやう。

花壇の場所 花壇を設置せんとする場所は成るべく日當りの好き所を撰定せねばならぬ但し最初より花壇に苗を栽植して仕立るには上記の如く陽面せる場所を選ぶのは最も必要な条件の一つであるが若し鉢植又は籠植として別地に栽

培したものを花壇に移植し花壇を作り上げる様な場合には必ずしも陽地でなくともよろしい。

花壇の構造 花壇の大小廣狭方向等は庭園の位置及び培養者の意考に依つて一定しないけれども先づ前面を南方とし長方形に依り地上より五六寸の高さとし其の内部を四五寸に切り下げて其所へ赤土を入れた斯くして其の面を平らにし少しく壓迫を加へて三列に横線を引き其の線の上を距離三尺位直径一尺二三寸深さ八九寸の穴を穿ち其の穴の中は充分腐敗したる肥料を施し之を掩ふて植込むのが普通花壇の構造法である。

三間花壇 三間花壇とは間口三間奥行九尺の花壇であつて當今最も廣く行はれて居る斯界の通語である構造法に至つては別に大差はないが念の爲めに三間花壇に關する某氏の實話を紹介しやう。

花壇の床土は深さ一尺二三寸内外に掘り起して土塊木石瓦片等は篩にかけて除き後更に床上を打ち固の三間花壇となす此の花壇は三列二十株の定植分法であるから前後二列に七個づゝ中列に六個の穴を碁の目形に規則正しく掘る穴の



深さは約一尺二寸位徑一尺三寸位でよろしいが後列の穴は少々大きく掘らねばならぬ而して此の穴の下層に初春勿々人糞五合位注入れそれが乾いてから荒い土を少々許り入れ其の上に前年用意しておいた肥土を盛るのである。

四間花壇 これは間口四間奥行九尺二寸に繩張りして土を掘り起して均し而して地上五六寸の高さに地を盛り上げて能く壇面を均し斯くて株の配列を長さに沿ふて三列位となし各列各株の間隔を三尺位とするので普通一株にて十四五輪乃至二十輪内外を開花せしめんとするものを栽植するに適當な花壇である四間花壇の名は前項三間花壇に對し著者が假りに附したものであつて別に斯界の通語ではない。

花壇の準備 園養たると盆養たるとを問はず菊の培養土は毎年之を取り換へてやらねばならぬ若し之を怠れば充分の生育を見ることは到底不可能であるのみならず肥料も又他の草花類に比すれば餘程多量を要するものである之等の點より推考するに花壇の準備は早春より取りかゝらねば所謂好果を奏することは覺束ないやうである。

第二節 栽植

花壇の設備なれば次は栽植の順序であるが其の前に苗の撰擇に就て一言しておかなければならぬこれ最も重要な事項であるからである。

苗の撰擇 春光漸く暖氣を催し既に降雪降霜の虞なしと思はるゝ頃花壇に植込まんとする苗を掘り出して撰擇する即ち苗の淘汰法を行ふのである此の時は苗の生育極めて善良であるから少し伸び過ぎたものは根莖共に切り詰めて假床に移植せねばならぬが若し又發育不良にして發芽後れたるものは十分發育するまでそのまゝ放置し勢力旺盛になるのを待つて移植しても決して後くない充分定植用に供することが出来るから周章て移植するには及ばぬ之を要するに苗の撰定は伸び過ぎた苗は切り詰め發育遅緩のものは芽立十分なるを待つて移植するのであつて成るべく中性のものを撰ぶと云ふことが肝要である。

苗の移植法 前記の苗を移植すべき床土は移植前約二週間位前に深さ七八寸位に掘り起し篩にかけて土塊木石等を除去し之に極めて稀薄なる人糞を施し畦



幅一尺五六寸乃至二尺三寸株間四寸の間隔を設けて移植するのである其の時は各地方の氣候風土等の關係によつて多少の相異は免れ無が東京附近では普通春の彼岸頃を移植の時期としておる念の爲めに一言附記しておきたいのは前年に根分して苗床に植え翌年春彼岸頃苗の撰定をして移植するのであるから菊苗は定植前に都合二回程移植することになるのである。

栽植の時期 さて花壇菊栽植の時期は何時頃が最も適當であるかと云ふに之も矢張り氣候風土乃至培養者の便宜上確然と一定して居ない或は五月下旬に栽植するものもあり或は今少し早目に植付くるものもあるが普通一般には八十八夜前後が最好適期とせられて居る。

栽植の方法 既に花壇の準備なり苗の撰定終らば次は愈々植付である花壇菊は一穴に三本宛植込むのが通則とせられて居るが無論一穴に一本宛栽植しても些も差支はない併し定植後或は病蟲害に罹つたり或は其の他變災で枯死する如き場合には一本植付では非常に困ることが往々にしてある故に安全の策としては矢張り通則通り三本植にした方がよいと思ふそして其の植込む方法は穴の

前部に一本後部に二本と云ふ割合に植付くるのであるが其の際本葉四枚を殘して芽を摘み去ること及び前年中より用意しておいた肥土を穴八分目位まで盛上げて植込むことを忘れてはならぬ。

種半主人談

前記四間花壇に栽植する場合に於ける種半主人の實際談を左に掲ぐ。

先づ後列より植付くるとすると左右兩端に一尺五寸位の餘地を存せしめ、それから後方壇邊より一尺四寸許り距てた所へ直線を引き其の線の處へ各株三尺を隔て、八株位を植えそれから尙後列から三尺位を距てた處へ一線を引き、之を中列として左右兩端に各三尺位を餘し各株三尺の距を保たせて七株を植えるのであります而して次に中列から三尺を距て、一線を引き此を前列として後列と同じく左右に一尺五寸位を餘して八株を植えるのであります斯の様にするると前列は前壇邊を去ること一尺八寸の位置にありまして總計二十三株を基の目に栽植するのであります此の植方は無論前列に低きものを植え漸次後列に従いて高きものを植えるのであります又花色の配置も能く注意して同



色のものが重り合はぬ様に配合をよくしなければなりません。而して花壇に苗を植えますには、豫め定めました位置を深さ一尺餘り圓形に掘り基肥として肥料を入れ、其上へ苗を植えるのであります。而して十分に灌水をなし、二三日間日光の直射を避けしめん爲め、適宜の方法を設けて日避けをなすが肝要であります。

第三節 手入

花壇栽植後の手入として注意すべきことは頗る多いが茲には其の中最も重要なもの二三を述べ、他は後章に譲ることとした。  
摘芽の程度 花壇に栽植の際本葉四枚を残して芽を摘去すべきことは既に栽植の條下に述べた通りであるが定植後と雖も、芽の延びるに従つて漸次に摘芽を行はねばならぬ。而して一本先づ十八九本乃至二十一二本位宛の芽を付けるのが普通でそれ以上枝條の續出はよろしくない。何となれば、余りに多く枝を出す時は、或は花形を少くし、或は狂ひ方を悪くする等の恐れがあるからである。

眞芽と脇芽 それから又花を咲かせるのに眞芽を残すか脇芽を残すかと云ふ説があつて或人は脇芽に依つた花の方が佳いと云ひ、或人は眞芽によつた花の方が上等であると云ひ、甲論乙駁であるが、之等のことは多年の培養に依つて深き経験を積み十分菊の性質を知りぬいた人でなければ是非の判断を下すべきものでない。故に我々如き淺學者流が云ふべき問題ではないが、併し實際に於ては脇芽に困るものが多い様で、又菊の性質から見ても脇芽を立て、培養すべき種類が多いと云ふことだけは斷言するに憚らぬ。従つて脇芽を利用して無論差支はないのである。  
最後の摘芽 最後の芽摘みは土用前か又は土用に入りて四五日位まではよろしいが、其れ以後に芽立つた菊は莖部五六寸の長さになると葉腋から側芽が出てくるから、之等は間斷なく摘み取り、脇芽ばかりを残して開花せしむる様にせねばならぬ。  
施肥法 茲に肥料と云ふのは既に第三章に述べておいた水肥のことであるが、花壇に定植後初めての施肥は成るべく稀薄な方がよい。即ち用意の上清一合を十



倍計りの真水に和して用い其の後漸次に苗が強性になるに従つて肥料も亦次第に分量を多くし且つ真水との混合量を濃厚にせねばならぬ要するに施肥の加減は菊の種類性質及生育状態等を察して臨機應變の處置を取らねばならぬ即ち施肥法の良否は培養者の技術に屬するものであるから茲に一定の方法分量等を述べぶることは出来ぬが初心者なれば成るべく稀薄な水肥を用ふる方が安全の策である云ふことを忠告しておく。

止肥と灌水 止肥は莖頭の蕾漸く結び初めてから施すのであるが此の際少しく足し土をするがよいと云ふ而して此の時には既に菊も十分生育して強健なる状態にあるものであるから肥料も稍濃厚なものを施し其の後は表土の乾燥する場合その都度灌水すればよいのである。

第四節 注意

花壇菊に對する注意 經驗の淺い園藝家が花壇菊を培養する際に往々見る欠點であるが或は莖に長短を生じ或は色の配合を欠き折角苦心して花壇に秀麗の

美花を歎賞しやうとした丹精も哀れ水泡に歸するの不結果を演ずることがあるこれは豫め花壇菊栽培に對する注意が足りなかつた罪であつて誰を恨みんやうもない故に花壇菊を培養するに當つては先づ左の必要條件を心得ておくことが最も肝要である。

- 一、菊の種類に依つて芽出の良否を豫知すること
  - 二、菊の種類に依つて成育に遲速あるを識別すること
  - 三、色彩の配合を豫め定めおくこと
  - 四、豫備(控)へ菊を培養しておくこと
- 豫備菊に對する注意 豫備菊は又控へ菊とも云ふそれは花壇菊が病蟲其他の災害の爲めに枯死する様な場合にその之を補充する即ち豫備の爲めに作つておく菊であるからである此の豫備菊の培養法も矢張り花壇菊のそれと同様でよいが狂菊は概して籠又は籠に作るものであるから之に使用すべき籠は直徑深さ共に一尺内外の圓形にして網代製のものに力竹を入れて運搬に便し稍頑丈なる仕立方のものに栽培しておかねばならぬ。



第六章 盆養法

菊の培養は十人十色で其の人の趣味嗜好により栽培の形式培養の方法も異つて居るのは勿論であるが既に前章に於て述べて置いた通り要するに園養と盆養の二途に出でない即ち茲にはその後者に就て聊か研究して見たいと思ふ。

第一節 盆養菊を作る心得

菊の鉢種培養法を説くに當り先づ最初に盆養菊を作る心得を述べておく必要がある著者はその拙き説明に代ふるに貴き經驗談を掲ぐるの最も堅策なるを思ひ現下盆栽菊栽培家として第二流の聲名ある一六會々頭貴者一邱氏の談片を轉載して同好者の熟讀翫味を乞ふこととした蓋し余輩の意見と符節を合するが如きものあるからである。

「盆養菊なるものは其の仕方が盆栽向に仕立られたものでなければ其趣味が乏しいことは無論である元來盆栽と云ふものは山河自然の絶景を寸尺の盆裡中に縮圖したものである故に自然の風景を愛づる風雅の人士が深山幽谷或は山河絶景の地を跋涉してから之を寸尺の盆裏に收めて是れは森林帯の實狀であるとか深山の幽情は斯くの如きものであるとか各自の好に應じて天地間に存在せる植物自然の美妙を模寫したものであるからそれ／＼自然の狀態に叶つた法則も次第に出来て来るものである。

現今流行の生花法ももと／＼天地間に存在して居る植物自然の妙を寫したものであるから其の極意即ち法則と云ふものが何れも自然と云ふことを基として居る故に生花を見るにも法がありて單に花又は生花の上部から見下すことは失禮で眞に禮に叶つた觀賞をせんには三尺の手前より水際から見初めて其の生花全體を拜見せねばならぬと云ふことである。

盆栽菊なるものを仕立つるにも矢張り生花で云ふ水際鉢の内部枝振り葉莖の配合輪の大小花の狂い方等に十分注意して其の上に菊莖が參差一様でない作り方に妙味があるので是は生花と同一趣向のものである然るに坊間に行はれて居る盆養菊は斯くの如く雅數あるものが甚だ少いのは實に遺憾の極みである故に



今後は勉めて此の弊を改めて行かねばならぬと思ふ。

第二節 植木鉢

菊 花 栽 培 法

鉢の撰擇 盆養菊を作るには先づ鉢の撰擇をせねばならぬ鉢も種々あるが概して瓦鉢即ち素焼のものが宜ひやうである此の種類は乾濕自在であるから菊の培養特に初心者のそれに最も好適して居る若し又本焼薬のかつた鉢の鉢を使用する場合には排水を良好ならしむる爲めに鉢の下層に二三寸位の厚さを度とし消炭瓦片等大豆程の大きさに砕いて敷き込み其の上に作土を見込まねばならぬ本焼の鉢を使用する際に此れだけの手数をしなないと排水不良の爲め折角栽培した菊も下葉枯れ初め十数日を出でずして悉く枯死するに至ることが往々にしてある故に経験の深からざる人は成るべく乾濕自在なる素焼鉢にて十分な培養上の経験を積み然る後に初めて本焼鉢を使用する様にした方が最も安全の策であらうと思ふ。

菊 花 栽 培 法

しておかねばならぬ本焼模様のあるものは勿論であるが假令粗製の素焼鉢又は常滑鉢の如きものであつても鉢と花との調和上後日開花觀賞するに際して正面に位すべき部分は成るべく鉢の縁に凸凹や疵のない箇所を撰定せねばならぬ斯の如きことは盆栽菊培養上一見些々たる事に屬する様であるが其の實決して然ではない即ち豫め鉢の表裏を明に區別撰定して置かなかつた結果は如何に枝葉の出來榮がよく又如何に見事に開花しても鉢の不好好により花容々の調和を缺き植物生態上の美觀は大に減殺され従つて觀賞の價値も亦著しく提傷せらるゝことになるものである。

鉢と輪數 鉢と輪數との關係も亦盆養上注意すべき要項の一つである勿論鉢の大小培養者の意考に依つて着花輪數も加減せらるゝものであるから一概には云へぬが從來の實驗上尺鉢仕立直徑一尺の鉢では一鉢に九輪乃至十一輪が普通である而して今一つ注意すべきは鉢植の着花數に一定の法則があつて八とか十とかの如き偶數を避け九とか十一とかの如き奇數を撰んで着花せしむることであるこれは如何なる原因であるか判然しないが察するに生花法の天地人と云ふ



様な事から来たものであらうと思ふ。

菊 花 栽 培 法

第三節 盆用土

作土の調製 盆用土即ち作土は花壇用培土を用ひても差支ないが又別に調製してもよい是等培養土のことに就ては既に第三章に於て陳べておいたから再び繰り返して詳述はせぬが要は排水佳良であつて土中に養分を含んで居るものを撰ぶことが第一である即ち塵芥土の古きものに砂土を混じて之を十分日光に乾かし之に寒中人糞尿を施し能く切り混ぜて堆積し降雪霜に曝して殺菌法を行ひ翌年彼岸頃碎きたる上更に日光に能く乾燥せしめて篩過したる後作土に供すれば最も適當なる盆用土であらうと思ふ。

盛土法 鉢植に定植の際は初めから鉢一杯に作土を盛つては不可ない最初植付の時は鉢の下層約三分の一位まで盛り込み其の後夏季土用頃に至りて第二回の盛土をなす分量は第一回の場合と同量でよろしいそれより以後は漸次施肥して其の上にて些少の土を盛り秋の彼岸頃に至り鉢の上縁より二寸位透く程度に第

菊 花 栽 培 法

三回の盛土をなすのである。以上三回の盛土は之を要するに菊の生育につれて間斷なく均一の養分を與ふるものであるから此の方法によつて培養されたものは養分の過不及なく充分の生育を遂げて其の結果も頗る良妙であるが若し之に反して植付當初より鉢一杯に作土を盛り込むものは其の生育甚だ不良なるのみならず土中の養分の散失する恐あり且つ幹の伸長に従ひ下葉枯れ落ちて鉢と縁と下葉との間があまりに明き過ぎて觀賞上少からざる不體裁を呈する等の缺點がある故に盆養の作土は生育強性に向ふに伴れて歩一歩づゝ足し土をして培養する様にせねばならぬ。

第四節 盆養肥料

盆養肥料と云つても別に特殊なものがある譯ではない菊の肥料に就ては既に當該章下に陳べておいたから茲には只置肥の調製及び之が施用法に就てのみ一言しておく。

置肥の調製 置肥と云ふのは前記の作土中に油糟及米糠等を混合して堆積貯



藏したものであるが、此の準備とても使用せんとする三四ヶ月以前になさねばならぬ、今此の置肥準備の混和分量を示せば。

土壤 二升

油糟(粉末) 一升

米糠 一升

●使用法 ●先づ鉢の下層に荒い土を入れ其の上に厚さ三四分位置肥を敷き又其の上に作土を盛つて定植するのである、それより以後は夏の土用に一回及び彼の彼岸頃に一回都合二回共作土盛込毎に少量の置肥を加へるのであるが此の兩度の置肥使用法は第一一回即ち定植の時に行つた方法とは斯の趣を異にし置肥を鉢の周圍に施さねばならぬのである、其の理由如何となれば總て盆養物は中高に土壌を盛込んであるから灌水又は降雨に際して水は一旦鉢の周圍に集り然る後に乾燥するものである故に置肥が鉢の周圍にあれば腐敗するにも容易であり又根張りも根元より却つて鉢の周圍の方に多く養分も鉢の周圍に多いから自然吸収にも甚だ便利且つ有効である、これ置肥は勉めて鉢の周圍に施すべしと主張する

所以である。

第五節 鉢植法

鉢植の方法も人によりて種々の説もあるが、茲には其の最も普通にして簡易な方法を略述しやう。

盆裡に植付けるには、大抵八十八夜前後より五月下旬までに行ふのである、作土は前記のものをを用ふるに越したことはないが、又花壇用の肥土を使用しても差支ない、而して莖葉の徒長を防ぎ、強健なる發育を遂げさせる爲めに、最初の間は少な鉢に栽培するがよろしい、其の鉢の大きさは直径深さ共に七八寸の素焼鉢を用い、生育十分なりと認めてから一尺若くは一尺二三寸の鉢に移すのである、初め植付の時は、一鉢に一本とし、本葉四枚を残して摘芽することは、園養の場合と同様であり、又作土は最初より鉢一杯に盛らす、三回に分ちて盛土することは、前述の通りである。

かくて鉢に植付てより二三日の後初めて灌水し、尙十分に根付きたるを儲めて



後も常に乾濕に注意して灌水は成るべく夕方に行ひ夏季土用後に至つて植替えをなす植替の後は追々酷暑に向ひ日一日と氣温高昇し従つて鉢内の乾燥も亦甚しくなつて來るから朝夕の灌水を充分に注意せねばならぬそして移植後給水代用の施肥は先づ一週一回位づゝ行ふがよろしい。

第六節 手入

灌水 灌水は朝夕二回と定めておくがよい、そして其の灌水の分量は給水して鉢の全部に水の浸み渡る位を適度とする然し曇天又は空氣中に濕氣の多い時などは鉢の乾燥も比較的遅いから従つて灌水の量も減少せねばならぬがそれに反して終日裂風吹き荒む日などは乾燥も亦甚しいので一日中に幾回も灌水せねばならぬ之等のことは培養家不斷の注意と手加減とに依つて機宜を失しないやうにするのが第一である。

支柱 支柱の樹て方に二種類ある即ち菊莖に應じた丈の支柱を立てるものと一つの柱の如きものを拵へ鉢の内部に四つ柱を立てて菊莖を之に縛り付るもの

とである兩法共現在用いられて居る支柱の樹て方で何れを選ぶも差支はないが余輩の私見を以てすれば鉢植の場合に於ては前者よりも後者の方が好いと思ふ何故かと云ふに總ての菊莖だけの支柱を狭い鉢内に悉く挿し込むことになる支柱の爲めに根を損傷するの恐れがある根を損すること多ければ多いだけ落葉を速からしむるからである此の理法は單に菊ばかりでなく多くの植物は皆然うであるが兎に角盆養菊の支柱は柱の上に多く立てて成るべく根元を荒らさぬやうにせねばならぬ。

催苔法 催苔法は觀賞上一種の風韻雅致を増さしむる點に於て必要な所以である之を行ふには秋の彼岸頃先づ第三回目の作土を盛込みてより鉢の内部の體裁を整ふる爲め園内又は他の場所より所謂苔土を集め來り一旦之を日光に晒して粉末となしたるものを篩過して鉢中に撒布する時は日ならずして鉢の内部一面に縁滴る斗りの藓苔の滑かなるものを生ずるのであらう莖頭に覆郁たる黄菊白菊との色彩の調和は勿論花草草姿との配合上頗る觀者の美感を引くものである。



第七節 注意

盆養菊栽培の要項に就ては以上にて其の大體は盡きて居るが尙初遣として左に注意すべき二三の事項を附記してみかう。

一、園養の方は莖幹の徒長を比較的嫌はないで専ら開花に重きを置くが盆養の場合には之に反して莖幹の徒長を最も忌み且つ花も葉も俱に美ならんことを望むのである。

二、盆養菊を作る上に於て特に注意すべき要項は左の三點である最も園養の場合に於ても此の三點に注意すべきは勿論であるが殊に鉢植の場合に於て最も肝要である。

(イ) 丈は餘り高くせざること

(ロ) 花は成るべく美大ならしむること

(ハ) 葉は固有の光澤を帯び而して下葉を脱落せしめざること

三、右の如く鉢植の分は成るべく丈の短矮にして下葉の枯落せざるを宜しとす

るが故に盆養にせんとする菊苗は挿芽にて作るがよいと云ふ人もある蓋し苗を植えたのでは徒長し易く下葉が枯落し易いからであらうそれは何れでもよいが兎に角如上の要點に準據することは必要であると思ふ。

菊うりや菊に詩人の質を賣る  
菊は山路蜜柑の霜を契りけん  
土器の手際を見せばや今日の菊  
菊を切るあとまばらにもなかりけり  
月花も皆白菊の夕かな  
赤菊や茶のくれぶりも縣めく  
着せ綿や老ひ行く菊の花の顔

其 暮 其 其 斗 兄 俗  
角 角 角 角 入 直 青



培養の形式即ち仕立方に就ても或は一莖百枝を以て誘るあり或は糸釣を以て慢すにあり百人百様に到底雲の如く斯道専門家の各仕立方を紹介せんことは至難の事であるが茲には其の最も普通にして容易なる一輪咲千輪咲鬘鬘掉造り篠作り等の四法に就て少解を試みやう、

### 第七章 仕立方

#### 第一節 千輪咲法

千輪咲とは一株に六百輪乃至千輪以上の花を開かせる方法であつて園養中最も栽培の困難なるだけそれだけ興味も亦多大である今千輪咲仕立方に就て二つの實驗説を記さう

第一説 千輪咲を仕立つるには三月の末から四月へ掛けて株分を行ふので其の法前年の株を掘つて其の中から大丈夫な成るべく短かい然うして太い苗を一本取る餘り長いものは三寸位に切り縮めて勿論肥培を懇ろにしたる且又充分耕

したる日當りの好い所に植付け六七葉を出した頃に四枚か五枚の葉を残して其の他のものを摘み採り其の摘み取つた所から二三本の新梢を出さしめ此の新梢が日を経る度に伸長し前の如く五六葉を出すにあらば又もや二枚或は四枚の葉を残して心を摘採りかくて其處から新なる梢さしめるのである斯くの如くすれば次第に澤山な梢が出るから之を五月の初旬より中旬へかけつ一株二三本づゝ花壇に本植する本植後も始終夏土用までは前の如く摘み怠りなく蕾が出た頃に支柱を興へ一莖に若し三個の蕾が付いた時は二個を残して其真中の一個を摘採るが宜い此の蕾の出る頃には能く土地が乾燥するから透さず日向水を興へて其の後は一切肥料を用ひぬやう唯花が三分通り開いた頃充分腐敗したる水肥を興へる

第二説 千輪咲は澤山の花数を要するを以て成可く伸長の好い枝数の多くなる性質の中菊を撰ぶことが肝要であるをして大概千輪咲は普通の根分けより稍早く即ち十一月下旬の頃に肥大なる強健の苗芽を親株より掘り取り肥沃なる床場に調合土で植えて十分なる防寒の手當を施し再三稀薄なる肥料を興へ勉めて



莖幹の肥大を計らねばならぬ斯くて苗の七八寸に延びし頃其の頂芽を摘去し八九本の腋芽を發生させて各枝に五枝の葉も出した時四枚を残して摘み去るのである而して各枝に四芽を發生せしめて五月初旬に於て花壇に定植し爾後數回伸長するに従つて摘芽し夏土用に至るまでに目的の數に分枝をなさしむるのであるが此の枝梢の配列如何によりて或は船底形或は小判形等種々の名稱のあるが如く其の所要の形狀に應じ各支柱を配りて結立を爲すのである。

第二節 一輪咲法

一輪咲とは一株一莖を出さしめ一輪一花を開かしむる方法で専ら大輪菊に應用し其の花容の肥大を賞せんとする場合に行ふ仕立方である。

第一説 一輪咲の花を賞せんとする場合には三月の頃至つて強健なる苗を植付け其の苗が四五寸に伸びた時に三四枚の葉を残して他を摘み採れば前の如く二條或は三條の新梢を出す其所で其中丈夫なものを一本残し他を摘み採つて其一本の新梢が四五寸に成長した頃又枝葉を残して摘心し五月頃に本植して後摘

心せず其のまゝ成長せしむるのである。

第二説 一輪咲に仕立つるには根分法により強健肥大なる苗を養護して其が四五寸に伸びた頃四枚の葉を残して摘芽し二三の腋芽發生したら其の中で最も強壯なるものを一本を残し他は摘み去りて此も亦四五寸に生長した頃再び四枚の葉を残して摘芽し其の發生した腋芽中最も健全なるものを一本を仕立て他は前同様に摘み去りて五月上旬中旬の頃三尺の距離に定植しそれ以後は一切摘芽せずして其のまゝ成長させ若し腋芽の出るものなれば悉く之を摘除して始終一幹を養成して行つて豊大なる美花も見るを念とせねばならぬ。

第三節 鬢差作り

鬢差作りも一種の興味ある仕立方であるが此の作り方は前記千輪咲一輪咲等を異り一株に十五輪を限り開かせしむるを良しとするものである而して此の一莖十五輪を得んとするには三四回の摘芽を行ふべく所要の十五輪を得ば此の芽に支柱を興へて仕立て開花前に至りて竹又は鐵線の類を以て上部外面に輪を



掛け、恰も婦人頭髪の髷を張りたるが如き形状に配置するのである。而して又全體の形状より角鬘、差九鬘、差等の名稱もあるが要するに此の仕立方は専ら大菊中菊にて作るのである。

第四節 篠作り

篠作りとは一言にして之を云へば自然のまゝの仕立方である。菊莖を色々に撓めたり花首を一樣に取り揃へたり、人工的の技作を加へず、花も葉も自然のまゝある高尚の趣味を味はんとする人の喜ぶ仕立方である。従つて別に之と云ふ操作の記すべきものもない。只専門家の意見を齟齬して見やう。  
菊作りは十人十色で各人の好がそれ／＼違つて居るにつれて其の作り方も一定して居りません。併し如何に嗜好が違つて居りましても枝葉が過大に徒長せしものを人工的に撓めて、其の上花首計り揃えて枝振りにも葉向にも少しも意を用ひませんものは如何にも自然の美妙と云ふ點に乏しい。従つて觀賞上の價値も又減する譯であります。それ故此の自然の妙味も最も能く發揮せしむる事

が出来て遺憾のない作り方は先づ篠作りであらうと思ふ。篠作りであれば枝振り葉向等を損傷することを全く避けることも出来ますから、自然花と枝振りの釣合を心得て培養致す様になりますので、詰り自然に叶つた生育を遂げられま

菊作り妻に親しき振りもなし  
菊のある時は咲けども貴船菊  
紫衣菊や梵唄雲を渡るなり  
白かりし花紅さまや常磐菊  
常磐菊の操は白き花なるか  
百千草皆萎れしを常磐菊

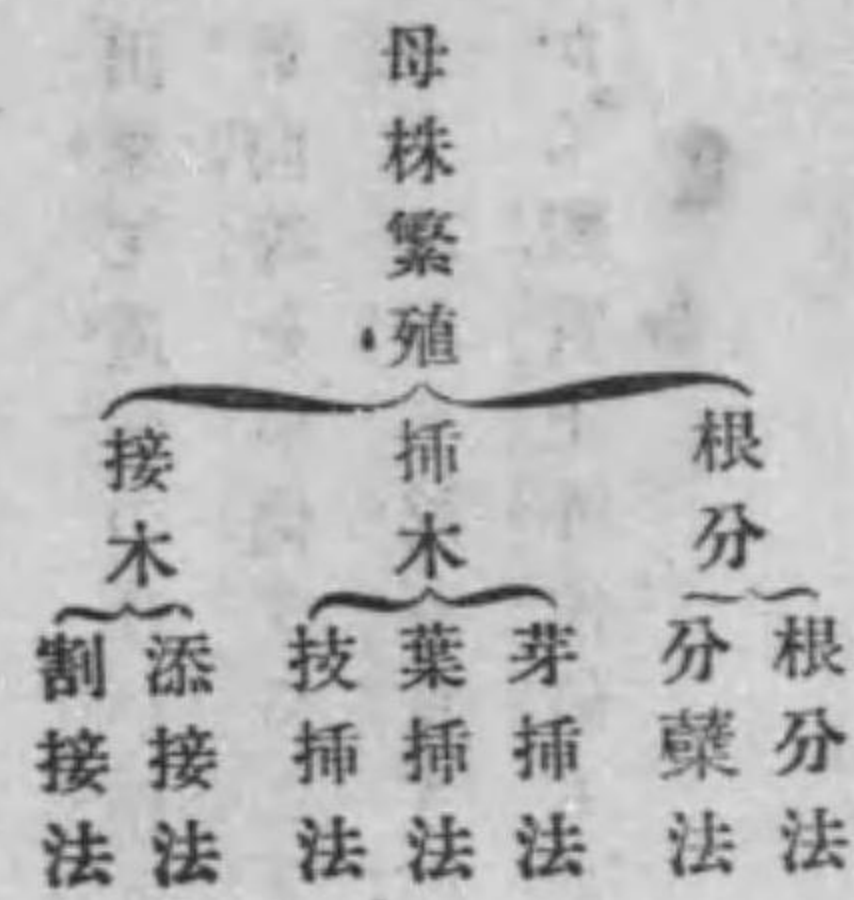
香 一 紫 不 一 可  
水 泉 水 盛



### 第八章 繁殖法

#### 第一節 繁殖法の種別

菊の繁殖は比較的容易なれども又培養法中最も大切なものは所作である而して其の方法も種々あるが之を要するに母株繁殖と異株繁殖との二法に大別するこ  
とが出来る母株繁殖とは一定の種類を繁殖せしむる方法であつて根分芽挿葉挿  
接木等之に屬し異株繁殖とは母株と相異なるものを繁殖せしむる方法であつて  
實生は即ち之に屬する今菊の繁殖法を表示すれば左の通りである



異株繁殖—實生  
床蒔法  
鉢蒔法

#### 第二節 根分法

根分の時季 根分の時季は氣候風土の差異により苗の發育の遲速により又は  
培養者の意考により一様ではないが所謂菊作りと稱せらるゝ斯道専門家の根分  
法を見るに大抵冬至分けと彼岸分との兩説が行はれて居る而して實驗上後法よ  
りも前法の方が強性なる苗を得られ且つ活花もよろしく病蟲害に犯さるゝこと  
も少い利益があると云ふことである  
冬至分 冬至分とは前年十一月下旬乃至十二月間も冬至前後に行ふ根分法に  
して本法を行ふには先づ着手七日計り前より向陽の地を撰んで苗床を作らねば  
ならぬ苗床の廣狹は隨意であるが先づ奥行三尺乃至四尺位幅は苗數に應じて適  
宜に作り極めて稀薄の水肥を施すが普通であるかくて苗床の準備なれば次に  
苗を分ける順序となる苗を分けるには親株より生じたるものゝ中成るべく根の



横に延び擴かつた根の澤山あるものを撰び之を一本の間隔三寸幅一尺二寸の距離を隔てて植付けける植付後表土乾燥するを見れば適度の澆水をなして越冬せしむるのである。尙本法の場合には防寒除霜の設備をしてやらねばならぬ。  
彼岸分 彼岸法とは春三月下旬より四月下旬までの間に行ひ得る方法にして之をなすには先づ能く乾燥したる土を篩過膨軟ならしめおき長さ適宜幅三尺の苗床を作つておく根分の方法は前年生の根にして越冬せしめたるもの、根を掘り取り新芽一つを付けて切り切り口に木灰をつけて前記の苗床に三寸の間隔に保たしめて斜植するがよい但し此の際注意すべきは古根を附けざること及びその長く伸びたるものは二三寸に切り縮むること等である而して栽植後は毎日少許の澆水を怠らず四五日間は糞の類を以て日覆いを設施してやらねばならぬ。  
分藥法 本法は前法と異り本年生の幹の根部より生じたる葉を地下に存する根の白色の部分五分乃至一寸五分を付けて抜き取り根を存するものは其のまゝ園地に移植し細根なくものは一度砂子に富める土壤に挿木して繁殖せしむる方法である而して後者の場合には日光の直射を避けんが爲めに竹又は籐篋の類

を以て日覆を設備せねばならぬ。

第三節 挿木法

芽挿法 芽挿法とは菊の幼芽を土中に挿して發根繁殖せしむる方法であつて矮生の大輪なるものを得んとする場合即ち盆養種の良苗を欲する際に多く用いられる繁殖法である本法を行はんとするには矢張り先づ床地を選定せねばならぬ床地は朝陽を浴び夕陽を遮るが如き場所を選び豫め深耕して土塊を除き土壤を輕鬆ならしめおき茲に苗の柔軟なるものを探り來つて長さ三寸ばかりに切り其の三分の一乃至二分の一の深度に挿入する時季は五月より梅雨期までなれば差支ないが此の最好適期は梅雨六十日頃で曇天の午前中がよろしい。  
右の所作終らば根分の場合と同じく籐篋の類を以て日覆の設備をなし聽てその葉淡綠色に變じ且つその芽に小葉を生ずるを見れば正に活着する證兆であるから最早日覆を取り除くも差支ない斯くて漸次に生育伸長して新芽の丈三寸に達すれば花壇又は鉢に移さねばならぬ芽挿法を行ふに當りて最も心すべきは澆



水の度であつて寧ろ多きに過ぐるも少きに失せざるやう深く注意せねばならぬ  
實験説 以上にて芽接法の大要は既に盡きて居るが著者は尙本法の完備を期  
せん爲め左に種半主人の挿芽法を掲げて讀者の參考資料に供しやう。

挿芽は如何にして行ふかと云ふに六月上旬より中旬の間に菊の芽を二寸位の  
長さに切り之を清き細砂に挿すのであります。若し細砂のなき人は土を膨軟な  
らしめて其處へ挿しても宜い此の菊の芽は種屋より苗を購入して之を短く幾  
個にも切りて挿芽に充てゝも宜いし又幾年に買つて根株に發生して居る芽を  
截り取つて挿芽に充つるも宜い。  
而して此の菊の芽を挿すには二寸のものなら一寸餘りを砂又は地中に挿し上  
端を少し許り出しておけばよろしいのである挿芽の仕方は極簡易にせば切つ  
たまゝ直ぐに之を砂又は土へ挿せばよろしいけれども完全に挿芽せんと思ふ  
ならば清淨無菌の粘土に水を注いで煉り合せて長き棒状として是に適當の距  
離を隔てて挿すのであります。而して挿し終りたる上是に土壤を盛りかけて挿  
芽が五六分位顯はるゝ様にしておくが宜い此の仕方は極強健なる且發根し易

きものにて菊などには至極宜いが尙菊の中にも良種にて發根し難い種類に  
は、今一層完全なる方法によらなければならぬ是は現今の園藝家間に行はれて  
居る方法でありまして最初に少しく費用がかゝるけれども結果の良好なる然  
から云ふと容易に之を償ふと云ふことになりす。これは普通の木框にて長さ  
一丈二尺幅四尺の長方形にして向ふ側の高さ一尺三寸手前の高さ八寸の傾斜  
なる木框を使用するのであります。是は現今蔬菜の促成栽培や花卉の栽培など  
に使用せられて居るのでありますから大概此の菊の栽培などに注意して居ら  
るゝ人は知りて居られることと思ふが其の木框の土へ長さ四尺幅二尺の硝子  
障子四枚で覆ふ様になつて居ります。此の障子を雨天と夜間には閉め晴天には  
外づして葎簀を載せて日光の直射を防ぐ装置にしておくのであります。此の加  
減は餘程注意を要することでありすが此の木框の内へ細砂を水にて能く洗  
滌したるものを厚さ四五寸位に入れ能く均して其處へ挿すのであります。  
葉挿法 葉挿法は最も貴重なる種類を蕃殖せしむる場合にのみ用ひらるゝ方  
法であつて普通には多く行はれない。期節は五月上旬直徑一尺五六寸の鉢に能く



篩過したる土と河砂とを同量に混じたるものを盛り之に少しく莖皮を附着せ  
る葉柄を挿入し絶えず濕氣を與ふれば間もなく活着して其の根際より幼芽を發  
生する故にその幼芽が一寸ほどのびた頃肥料分を多く含んだ土を敷き詰めてや  
ればよい其の他の方法は凡て前芽挿法の場合と同様である。  
枝挿法 本法は本年生の幹より生じたる枝の基部より切り取り又は幹の一部  
を附せしめて切り取り前法と同じ方法によりて繁殖せしむるのである幹の一部  
を附着する際に皮のみ附着せしむればよろしいと云ふ人もあれどそれは何等の  
効用もない本質部を附すべく又むしろ撞木形に切り取る方がよい。

第四節 接木法

接木法は主として盆養の場合咲分け即ち一本の莖に黄白種々の花を咲かせん  
とする際に行ふ繁殖法であるつて花を咲かせんとする際に行ふ繁殖法であるの  
て興味の深きだけそれだけ特別の技術を要するものである。  
接木の時期 菊の嫁接は春季より秋季までの間は何時行ふても差支ないとし

てはあるが餘り早くても行かず又遅きに失すれば切角活接しても開花を見るに  
至らずして終ることもある故にその適期を逸せぬやう遅くとも七月初旬までに  
接木を終るやうにせねばならぬ。  
砧木の撰擇 接木に供すべき菊の砧木は健全強勢なるものを選ぶべきは勿  
であるが其の莖部も亦硬軟何れに偏してもよろしくない而して砧木の標準は菊  
の莖部の上から四枚目の葉部を横斷して砧木にするのが普通である。  
割接法 菊接木には添接割接の兩法あることは前述の通りであるが目今培養  
者間に一般に行はれて居る方法は割接法で結果も亦此の法に依るが良好である  
而して其の方法は先づ横斷したる砧木を二つに割り接芽を其の中に入れて  
である接芽は成るべく若芽を撰び上部より三枚目の葉の所を切つて使用するが  
よい又砧木の割目に挿入する部分は兩方より斜に約四五分位斜いで挟まねばな  
らぬかくて砧木と挿芽とを接觸させてからは直にその周圍を濡れたる紙にて巻  
き其の上を竹の皮又は藁の心の如きものにて軽く巻き、絲にて結束しておく  
施術後の管理 接木後當分の間は日光の直射を避けねばならぬ若し直に日光



に照すが如きとあればその局部は乾燥して折角の苦心も心泡畫餅に歸するであらう故に接木後四五日間は乾燥をさせない様その上に被覆を設けて其の乾燥を防ぎ又毎日一回その局部を見廻りて芽の稠れざる様霧吹きにて細霧を吹き掛けおくがよい尙其の他空氣の流通等に十分の管理をなせば約二週間の後には局部は全く癒全して砧木より養分を吸収する様になる既に此の期に至れば上部の被覆を除きて日光にあて又は結束せる絲などを取り除いても差支ない。

注意三項 接木の際若くは接木の前後に注意すべき事項は少くないが茲には

- 一 砧木と接芽との接觸部を縛る際には緊きにすぎず緩きに失せざるやう即ち其の中庸を得るやうに注意せねばならぬ
- 二 接木用小刀に最も鋭利なるものを撰び施術は迅速を尊ぶ若し否らずして或は鈍刀を用ひて切るに多大の傷を負はし或は遅々として施術をなすが如きことあれば遂に失敗に終るものである
- 三 従來菊花觀賞上の禮として黃菊を中央に白菊を右に而して紅花を左に置く

第五節 實生法

ことが法となつて居る無理矢理に此の禮法に則る必要もないか兎に角接木に於ては黄菊を最も勝れたものとしてあるから之を念として施術を行ふのも又一興であらうと思ふ。

異種繁殖たる此の實生法は珍品若くは變種を育出せんが爲めに行ふ方法であつて培養上最も趣味ある所作であるけれども又最も困難なる作業にして且つ最も巧妙なる技術を要するものである先づ順序として此の實生に用ふべく種子の採收法より述べやう。

採種法 良種子を得んとするには豫めその種類を區分して花壇に栽植しおき成るべく花の數を減少せしむると共に數回の水肥を施し花の満開を待ちて所謂人工媒助法を行ひ良種の交接をなさしめ斯くて結實したものは二十七八日の後之を採集し充分に乾燥せしめて貯蔵するのである。

人工媒助法 人工的に花粉を交合せしむる方法即ち人工媒助法にも二つの種



類

がある即ち一を交種法と云ひ一を交性法と云ふ。

(イ) 交種法 例へば中菊と大菊嵯峨菊と丁字菊とを支配するが如き

(ロ) 交性法 例へば中菊なり又は大菊なり同種類中の菊の異分種を交配するが如き

而して以上兩法とも交配の時期及び方法は同一であつて又容易である即ち雌雄の柱頭分裂するを見て紙捻の先端を裂きて軟かにし之に花粉を附着せしめて豫め定めおきたる他の菊の枝頭に交配せしむればよいのである。

播種床 播種するには先づ床地の準備が必要である所謂播種床は豫め町等に耕し十分に水肥を施し其の上には少しばかり土を篩いかけて能く均らしたただけでも簡便なものとしては差支ないが尙好果を收めんとするにはよく以上の設備と手数とを兼ねねばならぬ即ち菊花通なるもの、説によれば播種床にも肥料床と無肥料床との二様なりと云ふ今之を少解せん。

(イ) 肥料床 H 當り好き場所を選び四方に杭を立て高さ一尺位に横木を結び藁又は麥稈の如きものを以て垣を作り此の中に木葉又は古葉の半腐せるものを厚さ五寸程敷き込み能く踏み均らし堆肥を篩ひ分けて荒きものを下にし漸次細かきものを上になし一寸程敷き込みたる後稀薄なる下肥を施し播種期まで此のまゝにしておくこれが所謂肥料床である。

(ロ) 無肥料床 種床の周囲を高さ一尺位の板にて箱形に造り其の中に消炭一寸位を一層とし藁を厚さ三寸位敷き込み其の上に真土の荒きもの二寸を一層とし尙其の上に極細かく篩いたる真土八分に砂二分を混じたるもの二寸を平かに均らして置くこれが即ち無理肥料床の構造法である。

播種法 播種期は土地と氣候によつて多少の速遅は免れないが東京附近では四月上旬が適期としてある播種に先ちて先記苗床の如き完全なる設備をなすにこした事はないが若し又それだけの手数を省きたいと思ふ人は先づ春の彼岸頃乾燥に過ぎざる土地を選び深き五六寸位能く土壌を粉碎し表土を篩いて平滑にし茲に種子を播下するの簡易なる方法に依つてもよい而して播下し終れば其の上表を箒の如きものにて軽く叩き直に油紙障子又は硝子戸の如きものにて被ひ其の上に葎簀の如きものにて日覆をなし時々乾燥に過ぎざる様噴霧の様のも



のにて灌水しをく時は、能く發芽するものである。かくて十分發生したる時は、徐々に日光を直射させ本葉二三葉を出すに至れば、悉く上覆を除き小雨の時稀薄なる水肥を施し、雜草を去りて肥培に注意すれば、日一日と生育伸長して、總て五六葉を生ずるに至る。即ち花壇又は鉢に移植して培養するのである。

播種量 一坪に一合の播種量を普通として居るが、元來菊の種子は他の草花類等のそれと異り、一定に見分け難いものであるが、大抵種子六分、瓣層四分の混合と見れば大なる誤はあるまい。故に一坪一合は多少細かい感じがするし、或は多過すと云ふ譏りもあるかは知らないが、一坪二合位の播種量が適當であらうと思ふ。

實験說 尙實生播種法の家傳秘法とも稱すべき中山恒三郎氏の實験説を左に摘載して参考に供することゝする。因に記す氏は父祖傳來の有名なる養菊家にし

て、新花の育成には獨特の手段ある人である。

播種の時季は四月上旬を良しとす。併し播種前降雨頻繁なる時は、苗床に覆をなして適度の濕りと致します。苗床が降雨等の爲め凸凹をなしたる時は、掻き均らして充分に水平に至しまして、輕る真土を一分以下の篩に掛け、厚さ五六分程平

かに敷き其の上に種子を蒔き細かき篩にて土を振りかけます。而して被土の厚さは種子の半ば埋るを度と致します。

斯く播種したる上は直に被ひを致します。掩ひは南方を明け斜に簾を以て屋根を作り、菰又は古筵にて雨洩れのせぬ様に致します。種子發生するまでは、南方の風口をも密閉しおきます。尤も隔日位に掩を撤して見廻りまして、被土の白みかゝつた時は適度に灌水致しまして、過度の乾きを防がねばなりません。かく管理して播種後十四五日又は二十日間位も経過すると、最早發芽致します。其の状態は糸頭に粟粒大の貝割葉を生じます。勿論發芽當時は覆下に生育致しますから、甚だ軟弱なものであります。故に若し過ちて雨露に逢はしむるか、又は直接日光に照らさるゝあらば多く枯死の災に陥ります。故に其の覆を撤過するは、苗が強性なるまでは出来ないのであります。發芽後の管理は四五日も経過したる時、南方の風口を徐ろに取り外し、夜間は元通りに致しておきます。其の後十日も経過したならば、夕方少々掩を取つて、空氣の疏通を謀るとか、又は出前少々如斯く管理すると、成るべく苗を強性に仕立てます。而して最早十五日間も経過致



しましたならば、一二時間も日光に當てる、それから掩をする、と云ふやうにして、其の強性に生育するに従つて、全く掩を取り、徐きます、かくて本葉五六枚も出てから他の圃地に移植致します。

残月の雪か此處に常磐菊  
春菊や根分もせず咲き出る  
残菊の御宴もこゝに日和かな  
嫁入りの折しも野菊咲きに見  
長生の蝶々とまれ菊の花  
初菊や頬白の頬の白きほど  
菊十日流れをとめて小杯

青嵐木梅若布颯  
々雪兒仙翁舟颯

### 第九章 手入法

菊花の培養は他の多くの草花類に比してより多くの周到なる管理と丁寧なる手入とを要するものである、而して其の管理その手入も種々雑多であるが、茲には栽培上必ずし得心得をくべき主要なるものに就てのみ少解を試みることにする。

#### 第一節 灌水

灌水の目的 灌水の目的は勿論植物に水分を供給するにあるが、それかと云つて、濕潤に過ぐる程多量に與へてもよくないし、又少量に失して乾燥ならしめても不可ない要は常にその植物の生育状態に鑑み、氣候乾濕の度に注意し、適當の場合に適宜の灌水を誤らぬやうにすることが肝要である。

園養と盆養 園養盆養何れの場合を問はず、灌水は必要な手入法の一、種であるが、何れかと云へば、花壇培養のものよりも鉢植のものの方が、より多く必要で、且つ面倒であつて、灌水方法の如何により、盆養成績の良否が定まると云はれて居る位。



である故に茲に説く灌水の事項は主として盆養の場合だと豫め承知しておいて貰いたい。

時刻と用量 灌水の時刻と分量を知っておくことも必要である。某實驗家の言によれば灌水は朝夕の二度に朝四合の時は夕方に二合と云ふ割合に施すが一等よい併し盛夏酷熱の時に至れば此の分量を朝一升夕六合位に増し夕方の分には真清水のみよりは特に極少量の肥料を混合した方がよいと云ふことである。

灌水用水 灌水用の水は決して汲みたてのものそのまゝを使用してはならぬ。若し汲みたてのものを直に施用すれば菊の生育を妨げるのみならず却つて大害を與ふるものである故に灌水用水としては成るべく雨水の溜置きたるものを使用するがよい若し此の用意がなかつたならば井水の汲置きたるものを用ふるやうにせねばならぬ。

灌水の方法 灌水のとき等に就ては園養盆養各法章下に於て随時に述べておいたから茲には改めて説明せぬことにした。

第二節 支柱

支柱の必要 小菊又は文八作りなどにはあまり支柱の必要を認めないが其の他の培養に於ては園養盆養を問はず種類や仕立方を論せず必ず支柱の設備を要する若し定植後莖幹伸長して支柱を樹つべき時季にあつても此の設備をしなかつたならば菊は莖頭を垂れ終には其の重量に堪えずして自然に倒臥して了ふものである若し一度倒伏屈曲したものは再び直立させん原形に復せしめやうとしても覆れ盆に歸らず臍嘴の悔をしても及ばない結果を見る故に支柱は必ず之を設備してやらねばならぬ。

支柱の材料 支柱に要する材料は竹木何れでもよいが成るべくなれば篠竹又は蘆の如きものがよろしい。現今廣く一般に使用せられて居るのは篠竹であるが若し觀賞上一層菊の品位を高尚ならしめんとする場合には此の篠竹をエールタの如きもので黒塗りにして使用すれば殊更に妙である。

支柱の時季 仕立方により種類により生育状態により一様ではないが大低定



植後莖幹伸長して六七寸になつた時に建つるがよい何れかと云へば遅きに失す  
るよりも早きに過ぎた方が安全である。但し鉢植にて比較的伸長の難いものには  
餘り急いで支柱を建つる必要はない何となれば抑も支柱を樹つる目的が菊の莖  
幹を倒伏せしめないやうにするに外ならないからである。  
園養の支柱 支柱は菊の成長を見計らつて樹て是に結束すべきことは前述の  
通りであるが園養のものも盆養のものも其仕方によつて多少の相異がある即ち  
一輪咲の場合には一本千輪咲の場合には數百本其の他は枝梢の數に應じて漸次  
其の數を増し而して伸びるに従つて漸々上の方へ結束して行くのである。  
盆養の支柱 盆養即ち鉢植支柱の建て方に就ては第六章に於て一寸述べて置  
いたが尙或人の説を聞くに八月下旬頃になると菊の技葉共に生育して來るに伴  
れ菊の莖頭が垂れて終には折れるやうな恐れがある故に單に假り支柱として鉢  
の内側に篠竹又は蘆の如きものを七八本樹て其の周圍を蘭を以て二三段巻き大  
風雨に逢つても枝葉を損じないやうに準備する其の後十月初旬に至れば蕾が漸  
く膨らんで小豆大になると今度は本結定をしなくてはならぬ云々。

樹木の注意 支柱を樹てる際には餘程細心の注意をしないと或は莖を傷けた  
り或は蕾を落したりして積日の丹精を一朝にして滅茶苦茶にして丁ふことが往  
々にしてある故に支柱を樹てる時には衣類特に袂などが莖頭の蕾にふれぬやう  
又其の日は朝の灌水を中止して菊の勢力を減じさせ少しく萎れ氣味になつた所  
で支柱に結束せざる等の注意をなすことが肝要である。

第三節 芽の手入

摘芽の目的 摘芽とは菊の枝數を殖さんが爲めにその苗の四五葉を残して頂  
上の芽を摘み去る所作であつて其の方法に就ては既に前章に於て述べておいた  
から茲には其の他のことに就て二三點を掲げやう  
摘芽の時期 摘芽の時期は最初本葉に五葉を生じた時に行ふのがあるが一  
三回と順序正しく其の方法を誤らないやうに行へば目的通りの芽を得られるも  
のである而して最後の摘芽は大低土用前に行ふことゝなつて居る故に土用に入  
る十日ほど前に摘芽を行へば良種の芽を得且つ花も希望通りのものが得られる



が若し時季に逸して土用後になりたるものは發芽も面白からず又花も立派なものが見られないから摘芽は必ず土用前十日乃至十二三日頃に實行しなければならぬ。

菊芽の管理 眞芽も側芽も柳芽を缺いで後に出て来るものである、それで何れの芽を探つて花を咲かせると栽培家適宜で一定して居ない併し實驗から云へば側芽を立てた方が結果がよいやうである、芽を缺き取るにも莖の下部の方は發芽なるや否や直に缺き取つて手遅れにならぬ方が莖菊の生育上最も有利である、尤も頭頂の柳芽を缺き取る時は其の左右にある蕾になる花芽の中で其の生育強性にして佳良と認めたる蕾一つだけを撰擇してこれを培養するやうに心がけねばならぬ併しながら其の蕾になる時は撈り取り方に不自由で動もすれば肝腎な他の蕾まで損する様な恐れがあるから蕾の小豆大になつた時瓜先まで靜かに不用の蕾だけ缺き取るやうにしないでならぬ以上は黃白團主人の實驗録を抜萃したものである。

芽の良否 芽の良否は直に花の善惡に關係するものである、故に豫め發芽に際

してその良否を鑑別して眞に培養の好果を得美大の花を賞せんことに努力するが最も必要であらうと思ふ而して多年の實驗によれば其の良否を鑑別することには左まで困難ではない即ち芽の形圓くして白色を帯びたるものは強性であつて完全なる生育を遂げるが其の否らざるもの又は他の形狀色澤を呈するものは概ね不良の芽であると云ふ、これは芽の手入上心須の所作として培養者の深く注意せねばならぬ。

第四節 花の手入

花の着方 花の着方に就ても古來種々の説あり且つ種類仕立方等によりて一様ではないが要するに盆養園養共培養者の考によつて決すべき問題である、茲には鉢植の場合に於ける着花法に就て中野紋介氏の談片を掲げて參考にしやう。  
大輪咲は輪の大なるものを主として栽培するのであるから其の栽培法は一莖一輪咲きである、然るに中菊の栽培法は一莖より數本若くは數十本の發芽を待つて之を栽培して觀賞するのであるから尺鉢のものには七本或は九本位までの芽



を立てるのである。尚大きな鉢即ち一尺二三寸位の鉢にありては、二十輪位までの芽を立てる方が見榮がよいやうである。盆養菊も花壇菊も何れも輪は半數に作るべきものと云はれて居るから此の方法も忘れてはならぬ。半數に作るとは一鉢の輪が九輪とか十一輪とか奇數に咲かせることである。

花の覆ひ 菊花の將に破蕾せんとする様になれば、その盆養たると園養たることを問はず又仕立方の如何を論せず必ず先づ被覆物を設けて其の下に置かねばならぬ。而して此の花の覆ひをなすは單に風雨の害を防がんが爲めのみでなく寒に大なる左の三つの目的である。

- (一) 雨除けの爲め 若し此の設備がなければ大雨沛然として至つた場合には泥土に叩かれてその葉裏を汚し下葉を脱落せしむる基となる。
- (二) 日除けの爲め 強烈な日光の直射を遮断するは勿論大雨の翌日など強光線に射照されて盛に地面より發する蒸熱の被害をも防ぐことになる。
- (三) 防寒の爲め 開花後降雨霜露に逢はせる時は花命を短縮させるの不利あり又日光に浴せしむる時は花色を變褪せしむるの害あり之を防ぐ爲めに必要

なるのみならず又實に夜間防寒の爲めに不欠物たることを忘れてはならぬ。構造法 以上の目的に副ふ爲めには別に裝飾を要しないが又あまりに雜風景では歡賞上花の品位をも傷くることになる故に覆物は成るべく洒瀟たる情趣を失はないやうに設備する必要がある併し要するに普通に目撃する被覆物は左右後面は葭簀にて張り上部は花根形にして礫砂引又は油紙の障子を架するものが多い。

花の手入 尚最後に開花してからの菊の手入に就て某氏の實話をかゝげて此の章を終ることにしやう。

菊は咲いてから露天におくと取入れて置いたもの、半分の日數も持たぬ雨障子をかけたり何かして雨や日光を防ぐことは誰も知る所だが、さうして完全に雨日光風を防ぎ得た菊は咲き出してから五十日以上六十日位も眺められる鉢植の菊も八寸鉢尺鉢位なら家の中へ取り入れておく一度入れたら決して戸外に出す必要はない夜露にあてなければ悪からうなどいふのは素人考である。只鉢が乾けば少しづつ水をやらねばならぬそれも二日か三日目に一度で澤山である花の艶



もこの通りにして取り込んで置いて決して褪るやうなことはない、只金華山とか九重錦とか云ふ愛金ものは、八分咲位まで日光に當て置いた方が榮がよい、その他ものは全然日光に當てる必要はない、又市内などで塵埃のかゝる所では葉が汚なくなるが、これは見た目ばかりか植物のためにも悪い筆の穂で毎日葉も掃立ると驚くほど葉の艶を増し厚味も増して來る、これは十日許り試みに續けて見るとすぐ分る御苑の菊などはその通りにして手入するそうである。

### 第十章 驅蟲法

東籬の下霜に傲りでは高士と共に其の清節を讃えらるゝ位であるから菊は元來强健な植物であつて、疾病に侵さるゝやうなことはあまりないが、害蟲には頗る恐るべきものが少くない、若しそれ一朝此の害敵の來襲に會せんか、培養の妙法を極め管理の秘術を盡して育成せし名花も忽ち枯凋して榮花の俤をも止めざるに至り、千辛萬苦せし積日丹精の効も空しく水泡に歸して所期の清香秀姿を賞美し得ざるの悲運を見ること往々にしてある、故に菊花培養者は豫め深く此の點に留意して嚙齧の悔なからんことを期せねばならぬ、即ち茲には最も主要なる害蟲及び之が防除法の一斑を述べやう。

#### 第一節 菊 虎

習性形状 菊虎は菊の外圍麥薔薇等をも犯す害蟲であるが、就中菊に取りては其の文字の示すが如く猛虎よりも恐るべき大害蟲である、形状は蝨に似て頸部に



赤色の斑點を有し一見弱々しき蟲なれども飛行自在且つ舉動敏捷到底枝端などで捕捉することは出来ない而して其の飄然として飛び來るや菊莖の嫩芽より喰入し液汁を吸ひ悉して致命傷を與へ又以處となく飛び去る一度此の蟲の害を受けたる莖は傷痕より忽ち折れて萎凋枯稿し専門植木師の妙技を以てするも又如何とも復活の道なきほどの大慘害を與ふるのである。  
防除法 菊虎は前述の如く飛行自在且敏捷にして到底捕捉し難ひけれども朝露未だ乾かざる時に當りては葉と共に其の薄き翅雷いて露の重みに飛び得ざるの短所がある故に若し被害の兆あるを發見せば未明に起き出で、此の短所缺點を利して捕獲殺滅するが一等妙策である古人が菊を造るには早起させねばならぬと云つたのも此の間の消息を説いたものであらう。

第二節 蚜 蟲

習性經過 蚜蟲も亦菊虎に次で恐るべき菊花の害蟲である而して其の形狀は人の能く知れる如く極めて細かき一種の昆蟲であるし其の害なるや菊の嫩芽

の周圍に蝸附群生して養液を奪取し遂には萎凋又救ふ可らざるに至らしむるものである又此の蟲は驚くべき程繁殖力の強大なものであつて其の當初僅かに數匹なるに意を安んじ若し之を等閑に附して放擲せんか二三日の後は數百匹數千匹の多きを算するに至るものである尙此の蟲は巧に己の蝸附する草木の色に同化して時に人目を眩ませども幸に菊に生ずるものは多く灰黒色のであるから直に發見することが出来る。

豫防法

- 一 最も簡易なる驅除法は發見次第一々之を拂ひ落すにある其の法は先づ左手にて被害の莖を軽く持ち右手に棕櫚又は藁にて造つた箒を把り順次之を拂い落して殺す事である。
- 二 朝顔の葉の粘液を局部に附着せしめて驅除するもよいと聞く。
- 三 除蟲菊の煮汁を撒布してもよろしい。

第三節 其他の害蟲



以上の外向蝗蟲青綿尺蠖根蟻茶星等の害蟲があつて、それ／＼多少の患害を興ふるけれども前記のものほど猛烈でないから特筆する程の價値はないが、只一つ茲に附記しておきたいのは白星の害毒である。

白星とは菊の葉に發生する害毒であつて如何なる原因によつて生ずるか又如何なる防除法をすればよろしいか、それ等は今日の場合未だ不明であるが、兎に角若し一葉でも此の害を蒙ると忽ちの間に菊全體に傳染すると云ふ恐るべき害敵である。

事を未前に防ぐと云ふ事は萬事萬物、何れの場合にも必要である如く、菊の培養に際しても既に害蟲の來襲發生に逢ひ狼狽して驅除法を行ふよりも豫め強健なる菊苗を養成し、以て之等害敵の乘する機會のないやうに十分の注意を拂い培養に力むる方が何れ程利益であり又賢策であるか判らぬ、これ余輩が特に本章の末尾に一言附記しておく婆心である。

君子菊花栽培法(終)

附 錄

菊花發展史

左に掲ぐるは植物學の泰斗理學博士伊藤篤太郎氏が頃日東京日々新聞紙上に公にされた談話である就て見るに菊花培養者の必ず心得置くべき事多く且つ菊花發展に就て頗る精細を極めたものがある即ち轉載して以て本書の巻尾を裝ることとした。

花として最高等の發達を遂げ畏れ多くも我皇室の御紋章に用ゐられて居る菊が始めて支那から我國に傳來してから茲に千百年を過ぎた其の菊は今より三百二十五年前に歐洲にも輸入されて種々の園藝的變種を生じ觀賞植物としては今は世界に持つ唯さるゝ様になつたが西洋に於ける發達の仕方と我邦に於けるそれとは不思議にも全く正反對の徑路を執つて來た其を説明し證據を立てるために菊に關する彼我的發達史即ち古來の著書をざつと調べることがある。

我邦に於て初めて菊の書物が單行本として出版されたのは貞享二年で支那の徳



善齊の著『菊譜百詠』天順二年出版……西歷一四五八年、我長録二年を翻刻したものである。

此の書の中には支那の品種一百を挙げ名品につひて説明を施し且つそれを詠じた詩を一々付けてある。  
續ひて元祿七年(西歷一六九四年)には張愛梅の著した『菊花百詠』が翻刻せられ、同十二年には菊に關する我邦の著述とも稱すべき『千代見草』が出版されたが私は近年完全なるものを得た其の表紙には菊の道しるべ」としてあつたので始めて『千代見草』と同じ本であることがはかつた著者は京西の園丁とあるばかり名がない之は從來の翻刻物と違ひ菊に付きて實地に研究して作つたもので當時我國に於ける菊の明花二百七十品をあげてある其等の培養法はもとより菊の詩や歌も網羅してある順徳院御製としては

心あてにおりからけうややまかつの  
かきほに咲ける白菊の花  
がなど載つて居る下巻は圖譜で八十一品の花と葉とを對照し總て探幽の寫生に

關はる之によると其の當時の花の特徴を窺ふことができるので學術上参考とすべき好著である。

正徳三年(西歷一七一二年)には又田邊彦兵衛の『秋意古新集』が出版され同三年には京都の谷口七左衛門の『後の花』が出た上巻には當時の名花なる玉牡丹盛上萬里以下を名實物大に描き各小花の解剖圖を添ふこと最も學術的のものである此の二十

一品の内丁子菊雌雄兩全の花の發達したものが六品ある。  
今日の菊は花の心の部分即ち管狀花は殆んど萎縮して周邊の花即ち舌狀花の發達の最高度を示すものであるが然るに此の書によると舌狀花の發達ばかりでなく管狀花の發達も見らるゝ即ち今日歐化した花か此の時代にあるのは不思議である。

又正徳五年に同じく京都の谷口の出版した『花壇養菊集』志水閑事著にも此の管狀花の發達したものので居る此の時代は圓花の會の盛んな頃であつたため此の著の上巻には京都圓山に於ける圓花會場の圖が載つて居るが下巻には其の頃の菊花の圖がある此れに依ると丁子菊管狀花の發達せるもの(の種類が極めて多い、



百三十四  
そこで當時の菊の愛翫者の嗜好は今日西洋に於ける菊の愛翫者それと甚だ似て居るといつても可い西洋人の菊に對する今日の思想は、恰度正徳年間の思想にあるのである。

尙其の他の著者に就つて見ると、同じく正徳五年に出版された「猶存録」には菊を開削して其の舌状花の種類をあげ花の集合した團體俗に云ふ一輪を見ずして個々の花に付ひて説明してある、同年に又「乙未書菊集」が出版されたが之れは大本で菊の折枝を集めた菊譜である、當時菊の流行は非常なもので、東山菊花大會名寄花形附によれば正徳五年十月一日東山の大會二日は北野の大會四日は四條道場の大會八日は双林寺の西阿彌九日は寺町の淨花院といふ風に引續いて大會があつた位で寔に古今に見ざる盛會であつた。  
翌享保元年には志水閑事の著した「菊羽二重」が出版され、同時に京都の菊商竹屋彦兵衛外八人の作つた菊苗の目錄がでた、それに據れば當時の菊苗一本の價三兩とある。

享保二年京都の上村四郎兵衛の出版した「菊壇菊花大全」も此の時代のものである。

享保二十一年(西暦一七三六年)百菊亭見素仙の著した「扶桑百菊譜」は別の千代見草に次いで珍本で日本に幾らもない。

黄龍源瀨寛子猛の撰に成れる「菊經」は寶暦に江戸で出版されたが害蟲の圖迄附してある翌六年同人の「鄺園百菊譜」で同九年には京都の無儘藏の名で著した「菊花論」が出た併し之れは私は持て居らぬ、其の他天保元年には東都の阿部櫻齋が宋の范成の著した「菊譜」を翻刻し弘化三年には東都の菅井菊叟の花壇養種が出た之には鉢植の圖が出て居る此の時代にも管状花の發達した丁子菊が大部混つて居る併し舌状花の方が多く賞されたことは事實である。

降つて明治年間には有名薩摩の今井兼角氏の菊花明治撰があり京都の長谷川契華氏の寫生した「契花百菊」がある以上は皆版本だが其他寫本です、享保元年に菊文館主の寫した「菊作方仕法」の如き或は其の前の寶暦九年東都巢鴨の植木屋の作つた「秋菊譜」の如き名古屋の糸代の培養せる山菊を岡本久敬氏が寫生した「山菊譜」の如き文政年間に作られた岩崎常正の「本草圖譜」の如き、帝室博物館にあると傳へらるゝ無名氏の秋譜の如きいろ／＼ある。



英國の菊を培養したのは一七六四年(明治二年)チエルゼアの藥園で培養したのが  
 始である其の後熱心に菊を培養したザヒーン氏の論文が一八二一年倫敦の  
 園藝會から出版された其の論文の中には菊の原種と其の培養的變種との彩色圖  
 が載つて居る是等を見ると今日の東洋の菊花の様に舌狀花の發達したのが多い  
 一八二四年に至つて同氏は更らに新しき培養的變種を作り出し其の論文を又園  
 藝會から出版した矢張り奇麗な彩圖である一八二六年には更らに多くの變種を  
 作り其の論文を出版した。  
 其等を見ると此の舌狀花の發達したもので東洋の菊の變種と一致して居る。  
 要するに西洋人が始めて作り出した變種は今日の南洋の舌狀花に類似したもの  
 であつた是れが段々と發展するに従つて舌狀花の方が萎縮し中心にある管狀花  
 が特に大なる發達をとげた。  
 然るに日本に於ては最初が管狀花で近年に至つて舌狀花が發達した彼れと我れ  
 とは斯く反對の方向を執つて來たので面白い現象である(理學博士伊藤篤太郎氏談)

菊の說

左に掲げるは西歐の文學者メーテルリンクの菊に對する思想を譯出したるもので  
 あつて、梅峰淵村氏の筆にある。

十一月と言へば人のよく亡くなる時候に引續いて來る月秋の中では最も崇高な  
 又最も壯嚴の時季である私は年々此月になると偶然乍らよく菊觀に出會するの  
 が常である觀さへすれば濟むのだから場所は何處で見やうと關つた事はない或  
 は都合よく旅行先きで見ることもある又逗留地で見ることもある何れにして  
 もよく目につく花である花の中で何が一番普遍的であるかと云ふとそれは必ず  
 菊である其の種類も亦一番多いけれども菊の變異多様は恰も流行物の變異多様  
 と同じく云はゞ思ひの天國とでも言はべき點に於て一致しておる同時に絹  
 物とか組紐珠飾捲髪とか云ふものと同様に空會と光線とよりなる調和が菊を見  
 せて居る時間と空間とに何等かの暗示を與へて居る其の温容例へば双びなき美



人の如く時を問はず所を論せず、菊は常に犯すべからざる信條の膝に絶つて居る。だから縦令目途はなくとも一度玻璃包みの華壇に這入つて見るがよい空が良帕の様に見せて居る。一瞥すれば直ちに至高の觀念に觸れ傍若無人の美觀に驚く。又此合を見て居る。今年中に成し遂げた自覺ある努力を着取ることが出来るので別世界に於て今年中に成し遂げた自覺ある努力を着取ることが出来るのである。別世界と言へば確かに奇異獨得な世界他の花の別天地間にあつても尙能く陸離たる異彩を放ち得る様な別世界である。吾々は此所に來た時此の新來の觀念とは果して何物であるかを自問する。此の觀念とは果して太陽なれ將又秋なれの方から考へて深遠な觀念であらうか。又實地に必須不可缺ものであらうかと自問するのである。

二

其所で昨日私は觀菊會の優雅嬋妍を賞するたためにと出掛けて見た斯う云ふ風な派手な催會としては是れが今年の最終年が變つて再び野の芽生が二日の光明を搜り乍ら既に威勢よく萌え出る頃迄は暫く陽氣な催會に立合ふ事は出来ぬ。此れ

から十二月となり一月と改つて雪を見る例へば秋と春との間を劃つた廣帯の様吾々は此の雪の中に籠つて平和睡眠沈黙忘却の日數を指折らねばならぬのである。

屋内に這入ると宏大な透明のトームの下に菊花が燦然と咲き亂れて居る霧の多い月に特有な高貴な花である。そして世の貴顯紳士が其の下に集る。又あらゆる殿めしい秋は女神が異論な科を見せては其の側で舞踏する。その様子は恰も妖術の世界に酔はされて静止と叩き据られたかの様でもある。若し菊の價値を認め、其の美を愛好する人があるならば其の人こそ唯一目見るだけでも喜んで此を見る時如何に菊が暖昧な理想に向つて忠實乃至能動的に絶えず向上して行くかを見ることが出来るであらう。

暫く菊の卑しい素性に立戻つて考へても見給へ。或又往時の貧相な毛茸時代を回顧するのもよい毛茸と言へば素朴な小さな草花である。葡萄酒にママスク蓋薇を溶した様な色合で今でも落葉に戯れて路傍にうち悲しく微笑んでおる。田舎では屋敷内の荒れた畑中でよく之を見る。菊は更に大きな菊の團り乃至は羊



の毛の様な雪片と比較される或は圓枚とか球形とかに刻まれた赤銅なども比較される古びた銀球大理石乃至紫水晶の凱旋碑なぞと對比して見るのも面白い途に毛茸の花瓣を取つて兩者の怪しげなる事夢中の如き所に品隠すべきものである其の怪しげな花弁が恰も謎の如き秋の影秋の形を飽く迄も把柱しやうと欲するかの様に見える眠つてをる杜の懐に預けられた此の秋の影と形ちが懸ては蘭けて冬となるのである異常意想外な種々の變化に眼を走せるが宜い乃ち菊を愛し菊を賞せよといふのである例へば茲に非常に大きい星の家族があるものとする平面星爆裂星透明星立體星銀河及び地球の如く他の大空の星屑と同様な天體が數多ある此所でも不遜な梅の實がダイヤの露を待ち侘びて居る此所では狂的な不思議不自然の花環を謳つた歌が人を酔はし人の夢を愧らせて居る又蜜の様に甘い月の光りを見せ黄金の林燃え立つ湯卷きを示して居る美しい微笑んだ乙女の捲髪遁れ行く水姫の捲髪それから情けに焦れた松尾の神氣絶した海の神冷却つた生娘戯れ好きの小兒などの捲髪が何れも優しい皆天の使地の神人の母思想の界女が嘗て徐々と戦く手を伸ては撫付けてくれた捲髪である又此處では

分類等な様な怪物が紛糾して居る例へば蜘蛛蟻撃れたきくぢしや。パイナツブル、毛房薇蓄總介殼蒸氣微風鐘乳石の様子に結晶した氷や雪たばしる霞の閃き鳥の翼電光羊の毛の様に柔で鮮かな物樹々の梢粗辣な毛火葬堆狼煙光の爆發火の川や硫黄の流れ……………

三

茲に於て菊花の形状其の色彩及び陰影に對して何等かの影響をおよぼしてはゐなかつたらうかと云ふ問題が起る吾々の見る所では秋と云ふ候季がすでに花に色彩及び陰影を持たせるのを否認して居る只秋が惜しげもなく花に與へてをるのは微光である薄明りであるあらゆる收穫時の財産であるそして此等のものを與ふるや極めて贅杜に行けば雨のために木の葉の黄はんだのを見る平野に罩めた霧庭に置く霜降り積る雪此等すべての銀細工の色はやがて菊に惠む秋の色であるとりわけて宜いのは數知れぬ枯葉や死んだ杜の間を縫うて菊が氣儘に彩畫を描いてゐる事である或は金貨や銅牌の形を裝ふて自分を修飾して居る菊もある或は銀の釦となり銅の泊となり又餓鬼の乾葡萄となり千切られた琥珀となる



嫩た黄玉見棄てられた真珠燻した紫水晶火に入れた石榴石あれも秋の色を浴びて死んだ様もなほ玉の細工にも劣らず眩しく輝ひて居る、一陣の木風がさつと立てば此等の玉細工が悉く空虚な谷間や凸凹道に吹き寄せられる、けれども決して舊の主人を忘れ様とはしない、そして自分等が生れた時着て来た通り鈍い蔭色の法被をつけてゐる、勿論此等は舊主に反く様な事は秋が許さない義理としても貴族的に着物を着たり、春秋朝夕の更衣をしたりする譯には行かないのである。

四

併し自然の不注意な點に却つて有難い所がある、即ち花の世界には非常に手厳しく禁製されて居る色がある、花の色としては最も稀な色で大戟(Euphorbia)の花冠を除けば他に此の色を見る事はできない、獨り此花だけは繖形花莖、緑柄など種々異つた色の間に超然と此の色を仄めかしてをる、余の花に於ては此の花は花よりも下等で、賄部と云つた格の葉なぞの中に混つて、非常に排他的な奥宮の中に潜み込んでをる、葉の中に忍びこんでをると云ふても、事實を見れば白々しく這入つてゐるのは無い、例へば暴徒とか探偵とか乃至は鉛色の脱走兵とか云ふものゝ

様に誰を吐いて賈を使つてもぐりこんで居るのだ、此の賈をつかつた色とは果して何色かと云ふとは一種の黄色である、花には大禁物の此の色が落付のない月の光の淡青い間に恂々と浸つてゐる、例へば深い大海の蛋白色と同じ様に黄色の夜の虚偽の色である。

花ならば花の開く時或は凋む時にのみ、その末端にその色を見る、捕へにくく、捕みがちな、又脆くて胡麻化しの利く色である、捕へにくいと言つても、その色がなとは言へぬ、確に花の色に其の存在を示し、其れ自身の旗色を鮮明にして居る、目を重ねて見れば益々固定した色となり、確立した澤となる、若し光線の岩に罅隙を造つて其の所に此の黄色を安置しやうとするならば、プリズムの七色に表れた觀樂と絢爛とは擧げて罅隙を脱れて他の無垢なる邦土に落ち延びるであらう、其處迄追はねば再びもとの華がな宴樂に與る事はできぬ、此の黄色の迫害は將に花の園に於ける一大專斷である、又紀念とすべき一大戰捷である。

五

斯の如く變り易い花の形狀を面白かつたり、實のない花が落す白紙の様な陰影を



彼此言つて見たりするの必しも子供染みた事ではない、ラブレール氏が嘗てチューリップや梅の様なものゝ愛好家に關して何かに論じたことがあるが花を美化しやうとか詩歌視しやうとかする人々の事を云々するのはよくないことである、次に讀者諸君の記憶に残つて居る面白一節を摘出すれば、

「花好きの人は郊外に花園を備へて日の出から日没迄一日其所の番をして居る、種々な種類のチューリップの間立つて譬に根の生えた様な氣持になり乍ら先づンリテイア(草花の一種)を眺めて見る、大きな目を開いたり手に唾をついたり腰を屈めて見たり或は花の傍ににじり寄つては其れをためて見たりする、そして今日に限つて例になく美しいと思つて居る、嬉しくつて怦らん様な氣がして次にはオリエントの側に近づいて見る、それからイデウの所に居つて見る、更に轉じてクロイズ、オブゴールドを見舞ひ、ヤゲーサを訪問する、そして再びンリテイアの所に戻つて來る、疲れ切つて其所にしゃがんだら遂に午飯を忘れて了つた、復た此のチューリップを眺め出しては影がよいと云ふ形も色も澤も縁りも悉く上乘だと賞めて見る、未だ嘗つて神が何うだとか自然がどうだとか考へたことはない、如何

と云ふに神とか自然とか云ふものは自分が千兩だしても賣るきになれない、チュリップの球根を何うすることもできない程下らんものだと考へて居るからである、併し斯う言ふ花好きでも時代が變つて石竹が大流行となり、チューリップが滅切捨てられると嘗つて大事にしたチューリップを見ること、蔽履の如くロハで人にくれて了ふそれで斯う言ふ人は靈性も持つてゐれば相當に宗教的觀念を抱ひて居る、合理的の人間である、それが自宅へ歸つた時はうんと疲れもし、うんとお腹かすいても居る、一日の仕事を振廻つて見ると矢張り大恐悦なのだ、チュリップとは什麼もの位は識つて居る。

六

他人に會合へば今年は豊作だつたと云ふ蒲萄の收穫と仲々結構ぢやつたと吹聴する、斯云ふ人は話し相手の云ふことには一向無頓着である、只頭に考へて居る事は収益の事計りだ、従つて花の咄しから無花果の咄しに移り、瓜の咄しに落ちる、斯云ふ人に對つて誰か「今年は梨の當り年だ、枝が撓んで折れさうな程實つてるのや、桃も仲々の大當りである」と云つて梅の咄しなら何でも宜しいかと云ふと然



うでない私の梅が大當りだと云つたら不可ない彼の好いてるのは梅の内の又或る種類に属する梅であるだから其他の梅を話すと嘲笑する面を盛めて見せるをして客が行けば先づ自分の梅の樹の下へ連れて行く實寄せあつめて其の全數を等分するその一方を客に與へて他方を自分が取るそして斯う云ふ  
「何てお甘いんでせう!!! 貴方はお嫌ひ? 全く天の賜物ですわね何處にも是れだけのもものはありませんよ」  
と云つて鼻を擴張する獨り嬉しがつたり威張つたりするけれども殆んど謙遜の道を知つてない未だ曾て他人から嘆賞された事は無い人だけれど兎に角驚いた人間だわね! 正に未だ迄其の名を傳ふべき人である人類の中に只獨り斯の如き梅を所有する大盡があつて其の人の容丰風采はたしかに研究の價値があるとしたならば成るべく其の人の亡くなる前に一度其人の風采を拜んでおく必要がある」  
以上はラブレトル氏の説だが間違つて居る併し園藝など思ひもよらなかつた十七世紀頃に兎に角自分獨りで此の方面に活眼を開かうとした意氣は壯とすべ

く其の認見にも恕すべき點がある加之氏は非常に執固い花造で又殆んど狂氣じみた程の園藝家であつた今日吾々が立派な花壇を見る事が出来たり變化種屬が多様で味も亦佳良な青物や果物を食べる事が出来たりするのは大概氏のお蔭である菊の周囲のものだけについても直に鮮る例へば下等な庭園によく蔓延しておる紫萎薊の如きも今日では辛棒強い樹橋の爲めに巧みに退治されておるが是れと云ふのも皆小採集家の精微無量な努力が遺した功蹟であるその事業に大小成敗の相違あるは據無い。  
七  
人の富貴を得るのも大凡斯くの如きものである、自然的に於て乳臭を帯びた物と言つては何物もない花とか草の葉とか蝶の翼、巢、甲羅と云ふ物の穿鑿に熱中する人は只一微細な物の上に渾身の熱情を注ぐ人である、そして大なる真理は斯の如き微細の中に含まれて居る、一片の花の外形を首尾よく飾作する事ができたと云つて或は下らぬ事業かもしれぬけれども縦令霎時の間でも斯う言ふことを考へるのは懸て偉大な事業を産むの基礎である。



然らば斯く成功したるか爲めに深言な法則に悖り恐らく萬有の根元にして又如何なる場合に於ても永續すべき原則を破壊する様なことはなからうか苦し自然的の法則があまり容易に發見されたために其の限界を超脱したと云ふ風な事はなからうか？或は一時的意志を以て永遠の力に含まれたる意志を冒瀆する様な事は無からうか？苦し自然的事物の法則に背馳する殆んど超自然的な不思議力があるとしたらば吾々には能く其の不可思議力があるとしたらば吾々には能く其の不可思議力を説明することは出来なからうか？過度の虚榮を夢みるのは當に慎しむべきであるけれども此の夢にして初めて他の永遠の法則から擺脱し其の法則を超界しやうと云ふ希望を吾々に與へるのでは何からうか？況んや其の法則が更に吾々に接近し吾々に種々重大な價値を認めしめる法則たるに於てをや、簡言すれば萬有は相接觸し相提携して居る又同一の必要に迫まられ同一の神秘的原則に従つてをる其の精神に於て同じく其の實質に於ても同じで共に恐怖驚異の念を催させる。

々の眼の前に公開するだらうと思ふ。斯ふ言ふ譯で私は菊を愛する、又斯ふ言ふ譯で非常に面白く菊の進化を見やうと思ふ、私が永い間見た間で科の同じ植物なら菊程從順で温和なものはない、此れが一番手を入れやすぐ癖をつけ易い、一本の枝に異論な色形の花を咲かせるのは菊である、相當の考へと根氣とで押し通せば必ず是れは成功する此の意義に於て花は人間である、他日植物界に吾々の期待して居る所を現實して見せるものがある、つたら其れは恐らく墓地に咲ひて居る菊であらう、丁度家の番をして居るだから動物界の秘密を發見されるだらう様に植物界では菊から宇宙人生の第一秘密が暴露されるだらうと思ふ。

君子菊花栽培法附錄終



大正二年二月十一日印刷

大正二年二月十四日發行



著者

富益義衛

東京府豊多摩郡淀橋町大字角筈  
七百六十七番地

日本種苗株式會社

右代表者

井上龍太郎

東京市芝區新錢座町十番地

齋藤仙吉

東京市芝區新錢座町十番地

近藤商店活版部

印刷者

印刷所

發行所

東京內藤新宿  
電車終點際

日本種苗株式會社出版部

花の菊栽培塔法

正價金三十錢

郵税金四錢



【類書讀必家農】

井上龍太郎著 小野寺行三合著 (好評第十三版)  
**▲植物繁殖秘法** (洋裝菊版)  
 ▲正價金卅五錢 ▲郵稅金六錢

井上龍太郎著 (好評第十二版)  
**▲蜜蜂飼養法** (四六版)  
 ▲正價金拾錢 ▲郵稅金貳錢

井上龍太郎著 (好評第十版)  
**▲實用兔飼養書** (四六版)  
 ▲正價金二十錢 ▲郵稅金貳錢

井上龍太郎著 (好評第七版)  
**▲百合鑑** (四六版)  
 ▲正價金二十錢 ▲郵稅金貳錢

農學士富益良一著 (好評第八版)  
**▲實地養豚新法** (菊裝洋裝美本)  
 ▲正價金二十錢 ▲郵稅金四錢

農學士富益良一著 (好評第八版)  
**▲果實蔬菜新調理法** (洋裝菊版美本)  
 ▲正價金二十錢 ▲郵稅金四錢

農學士富益良一著 (好評第六版)  
**▲田害蟲驅除新法** (菊版洋裝)  
 ▲正價金卅五錢 ▲郵稅金四錢

農學士富益良一著 (好評第五版)  
**▲實用蔬菜栽培新法** (菊版洋裝美本)  
 ▲正價金卅五錢 ▲郵稅金四錢

農學士富益良一著 (好評第三版)  
**▲園藝講話** (菊半裝)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

農學士富益良一監修 (好評第三版)  
**▲內外球根培養全書** (口繪極彩色石版書入)  
 物寫生圖五十餘插入 ▲正價五拾錢郵稅六錢

【類書讀必家農】

編輯局編纂 (好評再版)  
**▲柿樹栽培法** (四六版)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂 (好評第三版)  
**▲農家行事** (菊半裝)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂 (好評第三版)  
**▲副業行事** (菊半裝美本)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂 (好評第三版)  
**▲各地方茄子栽培法** (菊半裝美本)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

農學士井上正賀著 (好評第一版)  
**▲燠炭肥料の話** (四六版)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂 (新刊)  
**▲寫生柿實圖譜** (彩色六度刷)  
 ▲正價一冊郵稅共金五拾錢

編輯局編纂 (好評第三版)  
**▲園藝行事** (菊半裝美本)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂 (好評)  
**▲農事雜誌** (菊半裝美本)  
 ▲正價金拾五錢 ▲郵稅金貳錢

境農學士序 小田鬼八著 (好評)  
**▲果樹栽培新書** (菊版洋裝)  
 ▲正價金五拾錢 ▲郵稅金六錢

關農學士序 皆川松清著 (好評)  
**▲實地肥料施用法** (菊版洋裝美本)  
 ▲正價金四拾錢 ▲郵稅金六錢



【類書讀必家農】

農學士 富益良一著

(好評第四版)

▲花の園藝 (菊半截裝) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢

富益紫怨著

(好評第三版)

▲田園野菊集 (菊半截裝) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢

富益紫怨著

(好評再版)

▲內外草花培養全書 (菊版) ▲正價金卅五錢 ▲郵税金四錢

富益義衛著

(好評再版)

▲實家禽新書 (洋裝菊版) ▲正價金四拾錢 ▲郵税金四錢

富益紫怨編

(新刊)

▲日常農產製造法 (四六版洋裝) ▲正價金二十錢 ▲郵税一冊貳錢

農學士 町井正路著

(好評第五版)

▲實地應用食用作物栽培法 (菊裝) ▲正價金三十錢 ▲郵税金四錢

農學士 町井正路著

(菊裝)

▲實工藝作物栽培法 (菊裝) ▲正價金廿五錢 ▲郵税金四錢

渡邊彦右衛門著

(好評第三版)

▲通俗肥料の話 (菊版洋裝) ▲正價金三十錢 ▲郵税金四錢

篠田平三郎編

(好評第五版)

▲藥草と毒草 (挿入畫二百) ▲正價金四十錢 ▲郵税金四錢

編輯局編纂

(新刊)

▲農家の副業 (菊版洋裝) ▲正價金三十錢 ▲郵税金四錢

【類書讀必家農】

小宮山素軒著

(好評)

▲作物病の醫者 (菊版洋裝) ▲正價金四拾錢 ▲郵税金四錢

編輯局編纂

(好評)

▲ダリヤ栽培法 (四六版洋裝) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢

編輯局編纂

(新刊好評)

▲萬年青培養錄 (四六版洋裝) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢

編輯局編纂

(新刊好評)

▲除蟲菊の栽培と其利益 (菊版洋裝美本) ▲正價金廿錢 ▲郵税金四錢

富益紫怨編

(最新刊)

▲田園野の花 (菊半截裝) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢

井關晚霞著

(好評)

▲通俗農事試驗法 (菊版洋裝) ▲正價金五十錢 ▲郵税金六錢

井關晚霞著

(好評)

▲乾燥蔬菜製造法 (菊版洋裝) ▲正價金廿五錢 ▲郵税金四錢

編輯局編纂

(新刊好評)

▲瓜類栽培法 (菊版洋裝) ▲正價金二十錢 ▲郵税金四錢

編輯局編纂

(新刊好評)

▲通俗養蠶實話 (四六版洋裝美本) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢

編輯局編纂

(最新刊)

▲各種大根栽培法 (四六版洋裝美本) ▲正價金拾五錢 ▲郵税金貳錢



【類 書 讀 必 家 農】

編輯局編纂

(最新刊)

▲各種蕪菁栽培法 (四六版) (洋裝美本)

▲正價金拾錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂

(最新刊)

▲各種牛蒡栽培法 (四六版) (洋裝美本)

▲正價金拾錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂

(最新刊)

▲各種葱及玉葱栽培法 (四六版) (洋裝美本)

▲正價金拾錢 ▲郵稅金貳錢

門田勝衛著

(最新刊)

▲農村と人物 (菊版洋裝) (裝美本)

▲正價金四拾錢 ▲郵稅金四錢

米國農學士 井上熊夫著 (最新刊)

▲犬の種類及飼養法 (菊版洋裝) (挿書入)

▲正價金五拾錢 ▲郵稅金四錢

編輯局編纂

(最新刊)

▲各種人參栽培法 (四六版) (洋裝美本)

▲正價金拾錢 ▲郵稅金貳錢

編輯局編纂

(最新刊)

▲各種菘類栽培法 (四六版) (洋裝美本)

▲正價金拾錢 ▲郵稅金貳錢

富益義衛著

(最新刊)

▲作物蟲害防除法 (洋裝菊版) (挿書入)

▲正價金三十錢 ▲郵稅金四錢

富益義衛編

(最新刊)

▲農業五十夜話 (菊版洋裝) (挿書入)

▲正價金廿五錢 ▲郵稅金四錢



344  
152



終

